# 目 次

```
第百五十一話 何故、日本に賠償請求するのか、イタリア
第百五十二話 台湾防衛に寄与した帝国軍人
第百五十三話 日韓請求権のバランスシートは?
第百五十四話 マニラ無防備都市宣言
第百五十五話 日本版「電撃戦」、成功の要件
第百五十六話 帝国陸軍は適応障害だったのか?
第百五十七話 マッカーサー参謀と呼ばれた男
第百五十八話 米空母サラトガは四度沈んだ?
第百五十九話 薄氷・僥倖の第一段作戦!
第百六十話 大本営発表の虚実!
第百六十一話 エラブカらの告発
第百六十二話 石油確保へ軍・官・民の連携
第百六十三話 軍人らしからざる者こそ!
第百六十四話 無抵抗の抵抗:ハバロフスク事件
第百六十五話 自らの非を認めたことは評価できる!
第百六十六話 総力戦下の技術と非人道性
第百六十七話 一縷の望みもなかったのか?
第百六十八話 ノモンハンの真実!
第百六十九話 戦場の武士道精神
第百七十話 生等もとより生還を帰せず!
第百七十一話 無慈悲・徹底的な日本破壊作戦!
第百七十二話 天皇免責と引き換えに東条に責任を!
第百七十三話 無様な自決未遂の意味するもの!
第百七十四話 その名も悲し恋飯島(レンパン島)
第百七十五話 国民性の差なのか、復讐心の裂度の差か!
第百七十六話 守備部隊の敢闘が北海道を守った!
第百七十七話 長蛇を逸したり!
第百七十八話 同床異夢の「絶対」も虚し!
第百七十九話 大勝利なるも戦略目的達成ならず、陸軍史上最大の作戦
第百八十話
       日本軍政の特色
第百八十一話 死んでも帰れぬニューギニア
第百八十二話 戦略調整なき同盟は同盟にあらず!
第百八十三話 未完の国家プロジェクト:戦争調査会
第百八十四話 敵将の日本軍評!
第百八十五話 数多の和平交渉不成就の原因は?
第百八十六話 日米暗号戦、完敗!
第百八十七話 生きていた特攻
第百八十八話 戦略の大転換出来ず、泥沼に!
第百八十九話 危険を顧みず、敵兵を救助!
```

第百九十話

日本的問題解決法の失敗

第百九十一話 日本は侵略国だったのか?

第百九十二話 背信行為、許し難し!

第百九十三話 主敵を見誤った?

第百九十四話 無条件降伏論争

第百九十五話 日本の敗因について

第百九十六話 ベストセラー作家の日本人処方箋

第百九十七話 大東亜戦争肯定・否定論

第百九十八話 大東亜戦争の世界史的意義

第百九十九話 我が国の再生を目指して

第二百話 終りに

番外編 強かな現実主義の道は

### 第百五十一話 何故、日本に賠償請求するのか、イタリア

日独伊三国同盟を締結し、我が国と共に戦ったイタリアが、日本に宣戦布告をし、戦 後敗戦国の汚名を逃れたばかりか、日本に賠償を求めてきた事実をご 存知だろうか?国際政治は正に複雑怪奇と云うべきか?その顛末を述 べたい。

### 1 枢軸国としてのイタリアの状況

当時のイタリアは、立憲君主制国家(国王エマヌエレ三世)であり、ファシスト党のムッソリーニは、1924年12月31日、独裁制への移行を宣言して首席宰相及び国務大臣に就任、政府権限を大幅に強化した。更に、1929年3月24日の総選挙で全議席を獲得してイタリアにおける一党独裁が確立された。

第二次世界大戦には日独伊三国同盟(1940年)を結んだことによって枢軸国側として 参戦する。参戦後はギリシャ更にはドイツの要請に応じてエジプトに侵攻するも、装備 の陳腐化や物資不足が進んでいた王国軍は思うように戦いを進められず、ムッソリーニ の威信は大きく低下した。

1943年の連合国によるシチリア上陸作戦(ハスキー作戦)を機に、国王やファシスト党内の和平派が政変を起こし、ムッソリーニは解任・逮捕され、バドリオ政権が誕生した。バドリオ元帥は、独に戦争継続を約束しつつ、連合国と休戦交渉を進めていた。休戦、その後には連合軍の一員として対独戦に参加することを狙っていた。連合軍は飽くまでも無条件降伏を求めていたが、名目上の休戦協定、実質的には無条件降伏となる条文で妥協を図った。然し、国王と政府は決断を躊躇した。伊の優柔不断に業を煮やしたアイゼンハワーが、9月8日、伊の了承なく一方的に無条件降伏を宣言した。1943年9月8日がイタリアの終戦日となったのである。

#### 2 独のイタリア進駐とムッソリーニの救出、内戦へ

ヒットラーは、イタリア北・中部への独軍の進駐を決断、イタリア国王や政府はローマから連合軍占領地域に逃亡した。9月12日、独特殊部隊によりムッソリーニは救出された。9月23日、ムッソリーニを国家元首とするイタリア社会共和国が建国された。

1945年4月、独軍は降伏し、4月25日イタリア社会共和国は事実上政権崩壊した。ムッソリーニも拘束され、射殺され、イタリア社会共和国も4月25日降伏した。

## 3 バドリオ政権の対独・日宣戦布告と対日賠償請求

パドリオ政権は、1943 年 10 月 13 日に対独、1945 年 7 月 17 日に対日宣戦布告をした。戦後、戦勝国として、日本に賠償金を求めてきた。が、日本政府はバドリオ政権を未承認であったことから、その権利を認めないとの立場であった。

横浜正金銀行の債務返還要求と民間人資産問題があった。債務返還 4 億 6345 万円の返還、120 万ドルの支払いで決着した。ただし日本側はイタリアの請求権を認めず、あくまでもこの支払いは賠償や補償ではなく一括見舞金であるとの立場を崩していない。

## 4 国連憲章の敵国条項対象外となったイタリア

1946年国王は廃位され、王国は消滅した。イタリアは共和国となり、1955年に国連加盟を果たした。敵国条項が適用される国の名は、国連憲章には書かれていない。定義としては、「第二次世界大戦中にこの憲章の署名国の敵だった国」(第53条2項)(日本、ドイツ、イタリア、ハンガリー、ルーマニア、フィンランドの七か国を意味する)。しかし、日本とドイツ以外の五カ国は大戦中に枢軸国側から離脱し日本とドイツに宣戦布告したので敵国条項対象外である。

\*強かというか、理不尽というか、国家の信義とは何かを考えさせられる。日本には真似の出来ない芸当だ。

### 第百五十二話 台湾防衛に寄与した帝国軍人

台湾との関係は、日清戦争に伴う下関条約に基づく日本統治時代(1895~1945)、終戦後の台湾との数年間の国交回復時代、1972年の日中国交正常化以降の時代と変遷した。日台関係は現在機微な関係にある。台湾は、日本にとっては政・戦略的に重要な位置にあるにも拘らず、一歩が踏み出せないジレンマを抱えている。

ところで、終戦後、中華民国統治時代の台湾軍にあって、台湾防衛に寄与し、台湾軍 創設に寄与した帝国陸軍軍人が居たのであるが、そのことを再確認すべきだろう。

- 1 根本博陸軍中将他
- (1)根本博略歷:福島県出身、士23期、終戦時陸軍中将、1966年没(74歳)
- (2) 駐蒙軍司令官として、終戦後も侵攻を続けるソ連軍に対し、 一切の責任を負うと日本軍守備隊に抗戦を命じた。八路軍から の攻撃にも耐え、居留民4万人を守り抜いた。8月19日、北支 方面軍司令官を兼任した。翌1946年8月、在留日本人の内地帰 還と北支方面軍35万人の復員を終わらせた後帰国した。迅速な



内地帰還・復員は、蒋介石の協力もあり、根本中将と中華民国軍の密接な連携の賜物であった。

(3) 台湾渡航(密航)と金門島決戦(古寧頭戦役)作戦指導

根本は、1949(S24)年6月、蒋介石の恩義に報いるべく、延岡から台湾に密航、発見・投獄されるも、台湾軍上層部の意向もあり、8月中旬蒋介石と面会、孤立無援の蒋介石は根本の協力を受け入れた。

支那大陸から僅か2. 1 kmに位置する金門島に、1949年10月25日、砲兵の射撃支援の下侵攻してきた中共軍8個連隊に対し、根本は顧問として作戦を指導した。誘致導入作戦は功を奏し、中共軍を見事に撃退した。これにより台湾の存立が確定したと云える。1952年6月帰国した。密航は不起訴処分。

- 2 白団 (ばいだん)
- (1) 白団結成

国共内戦に敗れた中華民国政府は、1949年12月台湾に移転(動)した。時を少し遡る同年9月10日、東京高輪の旅館で、日本陸軍将校と中華民国政府の関係者の秘密会合が持たれ、劣勢で大陸喪失の危機を迎えた国民党軍に対し協力する旧軍将校の団体として「白団」が結成された。

団長は、士23期冨田直亮元少将である。

(2) 台湾軍の基礎確立に寄与した白団

冨田らは大陸での作戦指揮を執るも、戦い利あらず蒋介石一行と共に台湾に渡った。台湾軍に対して、次のような教育を行った。

○円山軍官訓練団(1950~1952年)

普通班(少尉から少佐)、高級班(大佐以上)、人事訓練班及び聯勤後勤教育(現職 軍首脳等)、海軍教育

- ○石牌実践学社(1952~1965年)(本校出身者でなければ師団長以上に昇進できずと)
- ○陸軍指揮参謀大学(1965~1968 年)
- ○富士倶楽部(1952 年秋~1963 年頃迄)

軍事研究所、多数の旧陸・海軍軍人が参加して、各種研究・資料作成・分析等々

(3) 主要団員 募兵に協力した高級将校、主要団員(冨田氏ら7名)、

富士倶楽部メンバー (服部卓四郎氏他)

- (4) 蒋介石は白団の能力を高く評価していた。米軍は旧日本軍人の参加を問題視した。
- \* 日本軍人の経験と能力を、敵ですら高く評価して居た証左であろう。台湾軍には今な お脈々として日本軍の魂が継承されているものと信じたい。

(第百五十二話 了)

### 第百五十三話 日韓請求権のバランスシートは?

徴用工問題に関する韓国大法院の判決、日本側の輸出管理強化措置、韓国の日韓軍事情報包括保護協定(GSOMIA)を破棄通告と土壇場での凍結決定と日韓の関係悪化が安全保障関係にも波及し、貿易・投資関係も縮小している。有効な解決策が見いだせない状況である。徴用工問題は日韓請求権協定の解釈を韓国が誤断したことが発端である。

本稿では、日韓請求権協定の淵源であるサンフランシスコ平和条約まで遡って考えて みたい。

### 1 1965(S40)年の請求権協定の概要等

1965年に結ばれた「財産及び請求権に関する問題の解決並びに経済協力に関する日本国と大韓民国との間の協定」、略称は「韓国との請求権・経済協力協定」ともいう。両国の国交正常化のための「日韓基本条約」とともに結ばれ、日本が韓国に5億ドル(無償3億ドル、有償



2億ドル)の経済支援を行うことで、両国及び国民の間での請求権を完全かつ最終的に解決したとする内容である。これに対して、韓国内において朴正熙政権の屈辱外交で請求権の一部しか貫徹できなかったとの批判や、個人に対する請求権は消滅していないとする大法院の判断等がある。

2 サンフランシスコ講和条約に規定されている日韓の財産、請求権関連事項

大韓民国は、「署名国」としての参加を度々表明し、一時は署名国リストにも掲載されていたが、当時の大韓民国は日本に併合され、大韓民国臨時政府を承認した国も存在せず、また他の亡命政府のような「大韓民国臨時政府」の指揮下にある軍も存在しておらず、日本と交戦していなかったため、招請されなかった。

講和条約2条で韓半島の独立、第4条で、「両国間の財産及び請求権を特別調整する。在韓日本人財産に対し、アメリカのとる措置を承認」とされた。言う迄もなく、日本にも請求権があったのであり、それらを含め日韓間の請求権問題を総合的に調整しようとするものであった。

日本が、終戦時、韓半島に有していた財産総額は、52億ドルを超え、そのうち22億ドルが南朝鮮に存在していた。これらの財産は、米軍が接収し、1948年9月に韓国に移譲された。

韓国は、8項目の「対日賠償要求調書」を作成して要求してきた。

在韓日本人財産の取得により韓国の対日請求権はある程度充足されたとしての米国の仲 裁意見もあり、日本は請求権主張を撤回した。

8項目の要求事項の細部事項に関する協議は10年間にわたり継続した。韓国側の請求権を具体的に詰めていくと、要求総額7億ドルに対し、認定金額は7000万ドルにならざるを得なかった。韓国側は困惑し、過小な請求権額を経済援助で埋め合わせることで妥結した。然して、1962年11月日韓両首脳が合意したのである。

この5億ドルが後の漢江の奇跡を生んだのである。

### 3 国際的合意を反故にする愚

国際的合意は、国内最高法規をもオーバーライドするのが近代国際社会の常識である。政権交代の度に国際的合意が覆されるのだとしたら、当該国は国際的孤児にならざるを得ない。自国の最高裁の判断を錦の御旗にするのは理解し難い。

請求権問題は、完全かつ最終的に解決しているのだ。日韓のバランスシートを考えると、韓国にとっては極めて有利な形で終わっていると思うのだが・・

\* 日韓併合まで遡る向きもあるが、合法的な手続きを経て併合されたものであり、瑕疵 はない。併合後は日本国の一部であったのだ。そのことも肝に銘ずべきだと思うのだ が、認めたくないのだろう。

#### 第百五十四話 マニラ無防備都市宣言

2016 (H28) 年1月、天皇陛下 (現上皇陛下) は、フィリピンへの親善訪問出発時の 「お言葉」で"マニラ市街戦"に言及された。フィリピンの首都マニラは大東亜戦争 間、日本軍の占領、米軍の占領という稀有な二度の占領に見舞われた。1945 (S20) 年2月から3月にかけての「マニラの戦い」では、最大規模の市街戦が起き、10万 人の市民が犠牲になったと云われている。幾つかの論点があり、それについて述べた

# 1 「マニラの戦い」の概要

I shall return と宣って比を脱出したマッカーサーは、1944 年には比奪還に着手 した。日本は、レイテ沖海戦、次いでレイテ島の戦いで敗北した。比守備に任ずる山下 奉文大将率いる第14方面軍は、マニラの無防備都市宣言を検討するものの、宣言には 至らず、軍はマニラの放棄を決定した。この方針に対し、海軍部隊は残留死守方針で陸 戦隊を編成し、市街戦の態勢を採った。一部陸軍部隊も残留した。1945 (S20) 年1月、 連合軍はルソン島に上陸、米 14 軍団は 2 月 3 日マニラ地区に突入した。マニラ市街地 では、日米の戦闘に巻き込まれて市民が犠牲となった。3月3日、米軍はマニラでの戦 闘終結を宣言した。

# 2 マニラの無防備都市宣言問題

第14方面軍司令官山下奉文大将は、ルソン島での長期持久方針に決し、マニラは、 日本軍の比島攻略時と同じく無防備都市宣言を検討した。市民の被害の回避、短期間に おけるマニラ市民の避難の困難性が理由である。この方針により、陸軍部隊は一部を残 して、殆どマニラから移動した。ところが、第4航空軍富永恭二中将は強硬に反対、海 軍部隊もマニラ港湾の戦略的価値、陸戦への不安等から、岩淵海軍少将を長とするマニ ラ海軍防衛隊(マ海防)を新たに編成して市街戦に備えた。大本営陸軍部もマニラ放棄 には同意せず、結果的にマニラ無防備都市宣言は発せられなかった。

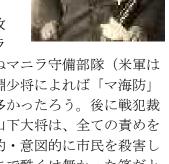
首都マニラの政治的価値は極めて高いものの、当時の日本軍の敗勢状況を考慮すれ ば、戦略的には放棄すべきであり、無防備都市宣言をして市民の被害回避を期すべきで あった。そのような視点を欠いていたのではないかと少々残念だ。富永中将は独断マニ ラ撤退を命令しているが、何ということか・・

山下大将の命に服すべき海軍及び第4航空軍の対応は理解し 難い。

# 2 市民の被害が、10万人規模に拡大したのは?

最新の研究成果によれば、被害者の4割は米軍の無差別砲撃 によるものであるという。米軍も当初は慎重であったが、米軍 の被害が続出するに従い方針を転換して無差別砲撃を行ったの である。

米軍に内通する市民も多く、ゲリラ化して日本軍に対して攻 撃をする者も多く、已むなく撃退している。市民なのかゲリラ



なのかの判別は極めて困難であったと云う。脱出もままならぬマニラ守備部隊(米軍は 「囲師必闕」を知らなかった?)が無謀な行動をした? 岩淵少将によれば「マ海防」 は鳥合の衆であったという。無秩序な防御による市民被害も多かったろう。後に戦犯裁 判で虐殺と指摘されるような事案も多々あったのだろうが、山下大将は、全ての責めを 負って従容と絞首刑を受け入れた。古武士の観がある。意識的・意図的に市民を殺害し たと日本軍の大々的な虐殺があったとする論もあるが、そこまで酷くは無かった筈だと 信じたい。

\*南京事件の捏造と誇大化とは違い、比はマニラ市街戦被害を殊更に言い募ることなく大 人の対応をしている。この差は何だろう。それにしても、大規模な市民被害が予想され る市街戦を如何に避けるかは重要な課題である。

## 第百五十五話 日本版「電撃戦」、成功の要件

第二次世界大戦初期、ドイツが、戦車部隊による突破が困難と考えられていたアルデンヌの森を一気に突破し、空軍と連携して仏領内に侵攻した「電撃戦」は夙に有名である。実は、日米英蘭戦開戦劈頭、日本陸海軍が敢行したマレー作戦も、日本版電撃戦と言っても過言ではないだろう。幾つか考えさせられることもある。

## 1 マレー作戦の概要

南方作戦は、開戦と同時に、マレー半島とシンガポールの攻略、香港攻略及びフィリピン攻略を敢行して重要軍事拠点を覆滅し、爾後蘭印の重要資源地帯を確保しようとするものであった。

兵力:日本軍=35,000、 英連邦=88,600

東洋のジブラルタルと称されるシンガポール占領を目標とするマレー作戦は、綿密な陸海軍調整、情報、兵站の準備を万端にして、海南島の三亜を出港した(海軍部隊指揮官:小沢治三郎中将)上陸部隊は、1941(S16)年12月8日の真珠湾攻撃とほぼ同時(実際はマレー作戦が早かった)に、タイ及びマレーのコタバル、シンゴラ・パタニ等に敵の抵抗を排除しつつ上陸した。山下大将率いる第25軍は、縦断道路1本で距離1100km、両側はジャングルとゴム林、大小250本の河川、ジットララインと呼ばれる防禦地帯を突破した。クワンタン攻略、エンドウ・メルシン攻略、クワラルンプール攻略そしてショホール・パル攻略を経て1月末にはシンガポールを臨むラインまで進出した。1月31日、軍命令により攻撃開始2月8日渡航開始し、予定の3か月よりも大幅に早い55日で、難攻不落の要塞シンガポールを奪取した。時に2月15日であった。この間、航行中であった英国東洋艦隊の新鋭戦艦プリンス・オブ・ウエルズ、レパルス等を航空攻撃により撃沈した。

英守将パーシバル中将はシンガポール失陥は断水が原因であると云っている。日本軍も表面的な華々しさは兎も角、砲弾が底をついていたという状況だ。彼我共に苦しかった。「作戦日数55日、1日平均20キロを進撃、交戦回数95回、1日平均2回、橋梁修理250橋、1日平均5橋」と言われる。

### 2 成功の要因

- ①陸海軍の密接な調整:上陸作戦は統合作戦であり、周到な調整実施
- ②制空権の獲得
- ③兵要地誌等情報収集:在留邦人や現地人の協力 をも得て作戦に必要な情報を収集
- ④チャーチルの過誤 マレー作戦を予測するも日本軍を過小評価、「大英帝国史上最大の悲劇」、シンガポールの背面に対する考慮少なし



- ⑤兵站面:戦車団の増強、自動車化歩兵師団の編成、銀輪部隊(第44話参照)の編成、 南方軍鉄道隊の活躍、工兵隊による迅速渡河実施、捕獲車両(2,723台)の戦力化(免許所持者が多数居たという)(捕獲車両の修理・整備体制:23野戦自動車廠、移動修理班編成等)、残地燃料及び捕獲食糧(チャーチル給養)の 活用、現地における食糧の現地調達も順調、トラックを舟艇に積載し海上機動で敵の背後を襲撃、シンガポール攻略に際し兵站態勢を再構築
  - \*電撃戦成功の要因の一つは、兵站補給の万全であった。
- 3 兵站軽視・無視と云われる日本軍であるが、マレー作戦では兵站が成功の大きな要因でもある。この様な日本軍がインパールや島嶼作戦では兵站で失敗している。成功の美酒に酔って原点を忘れたのか?既に国力を超えており無謀だったのか?質の伴わない兵站態勢だったのだろう。大作戦程後方面の態勢確立が成功の要諦だ。現在でも通用する金言であると思う。

第百五十六話 帝国陸軍は適応障害だったのか?

個人が、新たな環境に適応できないというケースがままあるが、個人だけではなく組織にも適応障害があるように思う。ある条件の下では精強無比な活躍をした帝国陸軍が、環境条件が異なった作戦では何ら為す術なかったと云われても仕方がない。盧溝橋事件に端を発する支那事変では、帝国陸軍は戦闘では少なくとも最強の軍隊であったが、日米(英蘭)戦となると一矢を報いたこともあったかも知れぬが、殆どの場合、連敗続きであった。

1 大陸作戦適応の陸軍が太平洋島嶼部における作戦遂行の悲劇

支那事変では、国民党軍と八路軍という相手ではあったが、何れも日本陸軍の敵ではなかった。相手は、いうならば、二流或いは三流の軍隊であり、日本軍にとっては正に 鎧袖一触に近い状況の連続であった。敵軍が周到に準備した陣地に拠る場合に於いても、伝統の白兵突撃で目標を奪取占領することができた。

ソ連を仮想敵とはしつつも、ノモンハン事件には学ばず、弱敵相手に連戦連勝して、 日本陸軍は戦いとはこのようなものであると思い込んでしまったのである。

然るにこのような日本陸軍は、日米開戦に伴い、戦場も気象条件も更には圧倒的な戦力差のある米軍と向き合わざるを得なかった。

日本軍は開戦初頭大小25の島を無血占領できたけれども、これらの占領島嶼群は陸軍兵力による相互支援は困難であり、謂わば大洋に浮かぶ点に過ぎなかった。不沈空母化を期したにも拘らずに、島嶼守備隊を支援すべき航空兵力は劣勢であり、殆どの場合、期待し得なかった。これらの占領島嶼25島の内、米軍が上陸したのは8島に過ぎず残りの17島は見向きもされなかった。米軍の飛び石作戦である。

然も、米軍は上陸に当たり、艦砲射撃や航空攻撃を集中し、島を耕すが如き状況であった。不十分な防御陣地、限られた守備兵力に対し、"鶏頭を裂くに牛刀をもってす"ともいうべき大部隊で上陸、殆どの場合守備日本軍は玉砕に追い込まれたのである。

2 何故、精強無比を謳われた日本陸軍が無残な作戦をせねばならなかったのか?

ノモンハン事件等で近代戦における火力の重要性は理解していたのではなかったのか?第一次世界大戦には本格的に参加しなかったけれども、近代戦の様相は解っていた 筈ではなかったのか?

大陸での戦いのイメージで島嶼作戦を敢行しようとしたのではなかったのか?南太平洋を進攻する米軍の戦術戦法や戦術思想を考慮することなかったのだろうか?米軍相手の作戦に対応すべく教育も訓練も装備も編成も変換されなかったのである。

次元の違う戦いには新たな戦いの方策を案出して、それに応ずる編成・装備・教育訓練を行うべきであったが、帝国陸軍は新たなドメインに対応できなかった。

戦いの最中に気付いても時既に遅しなのだろう。こんな筈ではなかったとの思いを抱いた第一線部隊指揮官も多かったのだろうが、・・残念だ。

マンモスが滅亡したのは環境に適応できなかったからだと云われるが、帝国陸軍もマンモスと同じ適応障害・不全だったと云わねばならない。

陸士・陸大の俊秀を集めた大本営は戦場の実相を掴んでいなかったのか?一部の者は 解っていたとしてもそれが大勢とはならなかった。対上陸戦闘の要領については戦法の 変更を指示したが、大勢を変えるには至らなかった。

\* 戦いの実相を予測して、それに応ずる編成・装備・教育訓練を施さなければ、必敗は必定である。異次元の戦いを強いられるのは悲劇である。将来戦を予測することは困難ではあるが、的確に予測し準備し得た者の上に勝利の女神は微笑む。大胆な変革無くして勝利無しと知るべきだろう。

### 第百五十七話 マッカーサー参謀と呼ばれた男

情報見積は、敵に関する情報資料を完璧に収集し得ても難しいものであり、更には極めて限られた情報資料のみで判断するとなると、正に至難の業である。限られた情報資料を蓄積し、それらを丹念に読み解くことにとり、敵の企図が判明することがある。 『マッカーサーの参謀』と呼ばれた堀栄三少佐(終戦時中佐)の業績は多くの示唆に富んでいる。

# 1 堀栄三少佐略歴

1913年(大正2年) 10月16日生 奈良県出身 士46期、陸大56期 大本営陸軍部参謀、第二部(情報部)勤務、独課、ソ課及び英米課

14 方面軍(山下大将)司令部情報参謀、終戦後陸上自衛隊入隊、駐独防衛駐在官、統幕二室長等歴任、退官後は、大学講師、西吉野村村長(在職中に逝去)を務めた。

戦中の山下奉文陸軍大将、そして戦後海外の戦史研究家にもその能力を高く評価されている。

- 2 台湾沖航空戦の戦果に疑義を呈するなど冷静な判断を下し、また、「敵軍戦法早わかり」を作成して第一線部隊に配布した。
- 3 米軍のルソン島上陸時期・場所の判断

方面軍の戦略持久への態勢変換の判断に資するため、米軍のルソン上陸の時期・場所の解明が喫緊の課題であった。米軍の過去の進攻パターン、収集したゲリラ情報、米軍機の航跡や度数の判断、域内の抗日運動の状況等、米軍にとっての比島解放の政治的必要性等、米軍の編成装備等、彼我の戦力分析等々を考量して、



山下大将に「一月下旬、リンガエン湾に上陸、当初  $5\sim6$  個師団等」と報告した。二週間で行った。

戦後、米軍から何故正確な見積もりが出来たのか、米軍暗号や重要書類の盗読ではないかと疑われたという。

4 米軍の本土上陸作戦に関する情勢判断

堀少佐が属する米国班では、米軍の本土上陸地点・時期・兵力判断が焦眉の急となっていた。米軍の兵力、日本南部の気象条件、ソ連の参戦に伴う米軍の早期日本占領の要、等々から判断し、九州上陸地点は志布志湾と判断した。関東上陸も同じ。

5 原爆投下機のコールサインの割り出し

米軍が発する電波に含まれるコールサインを蓄積分析して戦略爆撃部隊の作戦を判断しようとする地味な根気のいる作業を続けた結果、何処に○○戦隊が居ると判断した。その中で、特異行動をするコールサイン部隊(V600番台)が存在することを覚知した。電波傍受と監視を継続し、特殊任務機と呼んだという。8月6日、この機が、「我等目標に進行中」と打電した。0815広島に原爆が投下された。

以上をもって、大本営は原爆投下を知っていたのではないか、活かされなかった情報等との指摘が某TVやマスコミで為されたが、それは戦後の朝知恵、結果論だ。

6 陸軍特殊情報部(特情部)

大正10年に外務省電信課分室に、陸軍、海軍、外務省、逓信省の四省連合の暗号研究会が発足し、それが変遷を経て陸軍中央特種情報部となり、終戦時には田無から高井戸の浴風園という養老院の建物に移っていた。米軍の暗号解読は出来なかったが、通信情報を収集蓄積して色々有益な情報を得ていた。(5項関連)収集された情報は全て焼却された。残念だ・・・、

- 7 情報の基本は、地味で些細な情報資料の蓄積と冷静な分析である。日本は作戦・運用が優先され、情報は軽視される傾向にあるが、如何なものだろうか?少なくとも、G2とG3は徹底的に議論すべきである。その過程で見えぬものが見えてくる。
- \* 情報に関心を持ち、情報センスを磨く必要があろう。 (第百五十七話 了)

### 第百五十八話 米空母サラトガは四度沈んだ?

ある論文を読んでいたら、"昭和天皇が及川古志郎軍令部総長の報告に対し、『サラトガが沈んだのは今度でたしか四回目だったと思うが』と苦言を呈す有様であった。"とあり、日本海軍の戦果報告の杜撰さに関する記述があった。で、気になって調べてみた。サラトガは、厳しい状況に追い込まれながらもしぶとく生き残った。殊勲艦でありながらも、1946年7月25日、ビキニ環礁で原爆実験の標的艦に選ばれ、沈没し、同環礁海底で眠っている。誠に数奇な運命を辿った空母である。

参考:大本営発表と実際の相違

連合軍喪失:大本営発表(空母84隻、戦艦43隻) 実際(空母11隻、戦艦4隻) 日本軍喪失:大本営発表(空母4隻、戦艦3隻) 実際(空母19隻、戦艦8隻)

2 空母サラトガについて

サラトガという艦名を冠せられる米軍艦は全部で6隻あり、本話の対象は第五代目の「サラトガ」である。本艦は、1920年レキシントン型巡洋戦艦の三番艦として建造されたが、ワシントン海軍条約(1921年)による戦艦数制限を受け、航空母艦(CV-3)に設計変更、1925年進水



式、1927年米海軍に配置された。母港はサンディエゴ、1941年改修、公称3.3万トン、速力34ノット、搭載機数90~120機、延べ着艦機数89,195機は傑出。艦名の由来は、独立戦争時の激戦地であったサラトガに由来する。姉妹艦はレキシントンである。因みに我が国の大和型戦艦構想の始動は1937年である。

- 3 フェニックスかサラトガは
  - サラトガが参加した海戦と損傷状況等は次の通りである。
- (1) 北太平洋ジョンストン島付近 1942(S17)年1月9日 潜水艦攻撃 南東へ航行中のサラトガを含む任務部隊に対し、日本海軍潜水艦伊6号が魚雷3本 攻撃、命中、船体が傾く。伊6号は空母1隻撃沈と報告するが、実際は真珠湾に帰 投、6ヶ月の修理に入る。
- (2) ソロモン諸島南東沖 1942(S17)年8月31日 潜水艦攻撃 復帰したサラトガは、ガ島攻略及び第二次ソロモン海戦に参加した。ソロモン諸島 南東沖で、日本海軍潜水艦伊26号の魚雷攻撃を受け航行不能となり、重巡に曳航さ れ戦線離脱、ハワイに回航される。12月修理完了。ニュージョージア攻略、ラバウル 空襲、マーシャル諸島攻略、サイパン空襲、スラバヤ空襲に参加後整備、完了後戦線 復帰した。
- (3) 硫黄島 1945(S20)年2月21日 特攻機
  - 日本海軍第二御楯特別攻撃隊より硫黄島沖にて集中攻撃を受けた。4機の特攻機の体当たりと、投下された特攻機の爆弾2発が命中した。搭載艦載機が誘爆、艦内の航空燃料に引火して大破炎上したが辛うじて沈没は逃れた。5月22日に修理は完了し、6月3日に真珠湾へ戻り、再び航空隊の訓練に従事した。
- (4) 同艦は、日本海軍潜水艦で2回、特攻機で1回の大損害を受けている。しぶとさに は驚くばかりだ。多分にサラトガ撃沈と天皇に報告されたのは上述の三回の他に一回 ある筈だが、調査不足で不明である。別の空母をサラトガと見誤ったのだろう。艦名 を見間違うなど基本がなっていない。
- \* 戦果確認は難しいものだが、流石に水増しされた戦果に疑問を呈する者も居たようだが、黙殺された。そんな体質では困る。何れにしても、杜撰な戦果確認では的確な戦争指導が、出来る筈がない。悪意ある改竄、隠蔽、捏造と思いたくはないが、疑われても仕方がないとも言える。

### 第百五十九話 薄氷・僥倖の第一段作戦!

吉村昭著「大本営が震えた日」(新潮文庫 407p)を一気に読了した。1941(S16)年 12月 1日の御前会議で、12月8日対米英蘭開戦の断が下ってから戦端を開くに至るまでの1週間、陸海軍第一線部隊の極秘行動の全てを、事実に基づき再現した作品である。

大部隊による南方作戦及び真珠湾奇襲攻撃成功は、一に企図の秘匿に掛かっていた。本書を読んでみると、陸海軍が如何に周到に準備したとはいえ、奇襲に成功したのは奇跡に近い状況だったことが解る。正に薄氷の第一段作戦成功だったのである。400pの内容を簡単に紹介する筆力はないが、

敢えてそれに挑戦してみよう。

# 1 機密文書所持参謀搭乗機の不時着

支那派遣軍司令官への香港攻略命令文書携行参謀が搭乗した中華航空機「上海号」が、12月2日中国正規軍の支配地内山中に不時着した。開戦命令書や暗号書等が敵手に渡れば、日本軍の奇襲は成立し得ないものと大本営等は焦慮を強めた。通信傍受・解読、航空機による偵察・墜落機の破壊、確認・救出の



ための「地上部隊の派遣、諜報員の派遣等々のあらゆる手段を尽くし状況把握に努めた。殆どの乗員が死亡する中、当該参謀他1名が運よく生存、中国軍の追及から辛うじて逃れ、やっと日本軍に保護され、開戦命令書の処分を実施したとの報告で、大本営も安堵した。

### 2 南方作戦部隊の行動秘匿

南方方面上陸作戦部隊は、輸送船で集結地点に前進開始した。英軍の「総員外出禁止命令」や定期的哨戒実施指示等を傍受し、すわ企図が暴露したかと驚いた。準敵国の商船遭遇時には日本軍船団と遭遇しないよう指示し、念を入れて通信設備の破壊をも行った。敵潜水艦の何回かの出現も憂慮すべき事態だった。寺内大将の行動も秘匿し、またマレーの英軍の動向も、上陸地点付近の気象状況も気がかりであった。作戦地域の情報収集には特に力を注いだ。新鋭戦艦と巡洋戦艦は作戦部隊にとって大なる脅威であった。戦艦対処用の日本の機雷敷設艦3隻の行動も安全という訳ではなかった。蘭、英空軍機が接近し、開戦前の撃墜をも覚悟せざるを得ない状況であった。英爆撃機の偵察機を撃墜できず、企図が暴露したのではと危惧され、敵機来襲も懸念される事態となった。更にはタイ国には平和進駐を企図していたのだが、首相の所在も時間が迫る中当初不明で、辛うじて、日本軍隊通過の黙認を認めさせ得た。

### 3 真珠湾奇襲攻擊

連合艦隊の単冠湾集結に先立ち、防諜対策のために海防艦を派遣して処置し、真珠湾かラハイナ泊地かの判断、集結艦艇、湾内状況等のEEI 解明の為に数名の士官を送り込み、以前から配置されていた諜報員との連携を密にし、学校練習性を各海兵団員に偽装しての東京見物や九州方面からの大量発信等、偽通信、機密に触れた者の日記等の没収・開戦日までの軟禁、等考えられる限りの処置をした。ハワイから帰国する大洋丸(重要情報秘密携行)に対する米軍の厳しい検査による出港遅延はあったものの逃げ切り、機動部隊を支援する艦艇では艦長のみに作戦を承知させる等徹底的な秘密保持に努

り、機動部隊を支援する艦艇では艦長のみに作戦を承知させる等徹底的な秘密保持に努めた。厳しい気象条件の中、単冠湾集結部隊との連絡要領にも工夫を凝らし、機動攻撃部隊のコース選定の工夫、徹底的な電波管制・封止をした。先遣部隊艦艇の米海軍艦艇との遭遇は冷汗百斗であったが、米軍も接触を嫌っていたのか日本軍から離れていった。ソ連商船との遭遇の可能性があった。幸運にも敵の哨戒圏を見事に掻い潜り得た。

\* 史上最大の作戦とも云うべき対米英蘭戦の第一段作戦は上述 1, 2, 3 項で要約した通り、正に薄氷を踏む思いであった。大本営が震えた日との形容は実態を捉えている。

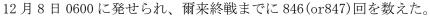
奇襲成功の要件は、準備の周到、企図の秘匿、対応の暇を与えぬこと等であるが、それが幸運にも結実したのが今作戦である。余りにも完璧な成功が後々悪影響?

## 第百六十話 大本営発表の虚実!

信用できない情報の代名詞としての「大本営発表」であるが、日米開戦初期は比較的正確であった。が、次第に戦果が水増しされ、我が方の損害が過小発表されてきた。その変遷を見てみると戦況が大きく影響している。終戦までに実に約900回にわたって行われた大本営発表の全体像を見てみたい。

1 日米英蘭開戦後の大本営発表の概要

「帝国陸海軍は本八日未明西太平洋において米英 軍と戦闘状態に入れり」との有名な大本営発表が



辻田氏の資料を参考に纏めると下表の通りである。

1		
,		1
70	1	

区分	期間	月平均回数	特色
1期	1941/12~1942/4	56回	日本軍優勢で、内容も比較的正確
2期	1942/5~1943/1	7.6回	日本軍敗勢で、ミッドウェー、ガ島戦
			果誤認
3期	1943/2~1943/12	15回強	日本軍劣勢明白で、劣勢の隠蔽、第一
			線の報告鵜呑み、信頼性破綻
4期	1944/1~1944/10	14.2回	戦局急激悪化で、戦果の誇張、損害の
			隠蔽増大、正規の誤認:台湾沖航空戦
5期	1944/11~1945/8	18.9回	架空の戦果計上、過剰表現抑制

## 2 「転進」「玉砕」の語彙使用の変化

玉砕の語彙が初めて使用されたのはアッツ島守備部隊の戦況を伝えた 1943 (S18) 年 5 月 30 日の発表である。以来島嶼守備部隊の玉砕が相次いだが、1944 (S19) 年クェゼリン、ルオット島守備部隊の戦況発表からは、「全員戦死」と表現されるようになった。一方、撤収との語彙から転進との語彙への変更は、ガ島からの撤退 (1942/12) からである。この語彙も、ニューギニア戦線の戦況発表で「撤退」との語彙を使用せざるを得なくなった。美化し、表現で糊塗することは難しくなったのだろう。

# 3 トピックス

- (1) 陸海軍対立の最前線 華々しい海戦と地味な陸戦、対抗意識の増幅 統一報道部創設するも実態は改善されず
- (2) 竹槍事件 海軍の発表内容に陸軍が異議を唱えた事件(1944/2/23 毎日新聞朝刊)
- (3) マスメディアと軍の一体化・癒着:マスメディアへの統制強化、メディア間売上の 熾烈な戦い、迎合、記者を報道班員に指定し軍属と。忖度する報道
- (4) 初期には正確な報道を目指し戦果修正もあり。中味の無さを修飾語で糊塗
- (5) 過大発表と実際のギャップ

連合軍喪失數 発表分(空母:84 隻、戦艦:43 隻)、実際(空母:11 隻、戦艦:4 隻 日本海軍 発表分(空母:4 隻、戦艦:3 隻)、実際(空母:19 隻、戦艦:8 隻)

(6) 原因: 戦果確認の困難性・誤認、第一線からの報告に反証出来ず・鵜呑み、 統帥部内の議論決着せず・妥協の産物化、士気低下への悪影響考慮 継戦意思・鼓舞の必要性、重ねた嘘の転換困難、被害の局限化意識

#### 4 今後の課題

国民の知る権利と作戦上の要求である秘匿の必要性の節調?国会の関与は?

### 第百六十一話 エラブカからの告発

エラブカ東京都人会代表の富樫氏(士58期、少尉任官直後終戦、エラブカ収容所に抑留、エラブカには相沢英之氏、板垣正等も収容)から「ソ連抑留体験者の告発」と題するDVD(言論テレビVol115)を頂戴し、早速に視聴させて頂いた。想像を絶する過酷さである。DVD等を参考に、その過酷さ・蛮行を記すこととしたい。

### 1 シベリア抑留の概要

ソ連は、投降した日本軍将兵・軍属、一部の民間人等約65万人(或いは57.5万人)が、スターリンの指示に基づき、労働力としてソ連領内等に移送した。主としてシベリア鉄道に沿う地域の収容所(ラーゲリ)約2,000に分散収容された。正に収容所列島だ。極東地域、シベリア地域、ウラル以西地域、ウクライナ、中央アジア地域、モンゴル地域及び北朝鮮地域である。厳寒、苛烈な強制労働、極めて劣悪な環境下、死亡率は10%を超えた。(因みに日露戦争時の死亡率4.6%) さらに問題なのは死亡者の全てが未だに特定されていないことだ。来日したエリツィンは「非人間的行為」と一応の謝罪。抑留決定の要因は北海道代償説(北海道北半分分割占領拒否の代替)が強いようだ。シベリア抑留は武装解除日本兵の日本家庭への復帰を保証したポツダム宣言に違反し、戦闘行為終了後に不当に留め置かれた抑留者は捕虜ではない筈だが、ソ連側は飽くまでも捕虜であると主張している。

2 エラブカ (第九十七収容所)について



現東タタールスタン共和国の東部、ソ連人も恐れたエラブカ収容所(思想犯の重罪人収容)、北緯38度線以北で抑留された富樫氏は、シベリア鉄道で行く先も不明なまま移送、脱走は死を意味、駅から徒歩で80km移動して翌21年元旦に到着、エラブカ収容者数約9千人、半洞窟兵舎(屋根のみ地表)、二段蚕棚に袋に藁を詰めたマット、Bラーゲリは将校用の収容所、大尉以上は体力的に重労働不適、体力消耗甚だし、暖房・炊事用だからとの理由で将校に労働強要、ソ連兵は質素な生活(相沢氏 facebook から)

- 3 長期抑留の過酷な状況等
  - ①1000 人単位の作業大隊に編制
  - ②将校労働の禁止に違反した自主請願方式による就労の実質的強要
  - ③人権無視の奴隷労働と変わらぬ過酷な労働の種類(収容所内の営内作業は除外)
  - ④ノルマの強制、時に連帯責任、銃口の威嚇下での作業
  - ⑤1日の食事量:300gの黒パン、薄いスープ、一杯の紅茶(砂糖10g付)、夕食ジャガイモ少々、常に空腹状態、栄養失調、水道水で腸チフスも
  - ⑥国際法違反の懲罰減食もあり、恐怖
  - ⑦自己調達(収穫時に組織的に?くすね、野ビルも食し、沼の貝採取、鼠で捕獲等)
  - ⑧一般的な収容所では「共産主義教育」「日本しんぶん発行」「階級闘争」の思想育成、転向者もあり。反ソ分子の吊し上げや露骨な暴行
- 4 シベリア抑留に係る課題
- (1) 死亡者の特定作業の遅延 ソ連の死者名簿引渡は約4.1万人のみ (確認済み死者数は25.4万人、行方不明・推定死亡者数9.3万人計約34万人)
- (2)賃金未払問題 日ソ共同宣言で双方の請求権放棄との関係で国に対する補償請求、 裁判では原告の請求棄却、シベリア特措法による一時金支給
- (3) 遺骨収集事業 収集遺骨に日本人以外の骨が混在していたことが判明、厚労省放 置。今後の進め方の再検討と集中収集期間内の収集要領の検討等
- \* 改めて、"ソ連の蛮行許すまじ"の感を強くした次第である。

### 第百六十二話 石油確保へ軍・官・民の連携

大東亜戦争は石油を止められた(石油の対米依存率は7~8割)ことによる自存自衛の 戦いであり、結局はその確保がままならぬまに、日本の戦力・国力が枯渇して終わった ともいえる。蘭印石油確保の為に、日本は必死の努力をした。見事な軍・官・民の連携 が行われた。その状況を管見しよう。

### 1 南方作戦の作戦目的とパレンバン攻略

南方作戦の目的は、南方の重要軍事拠点を覆滅して東亜における米英勢力を一掃すると共に、蘭印の重要資源地帯を攻略確保することであった。開戦

後、戦況が予想以上に有利に進展した。第16軍は、2月14日に パレンバン(2つの製油所の原油精製能力は、約470万kl/年) 占領した。(日本の平時の国内消費量は400万kl)

# 2 パレンバン製油所の占領

蘭印最大かつ東南アジア有数の大油田地帯であるパレンバン攻略に当たって、空挺作戦、提携すべき38師団の上陸が周到に計画された。攻撃前の破壊を予期し、無傷とはいかないまで施設の損害を局限した状態で攻撃奪取するかが最大のポイントであった。このため、第一挺進団の編成も訓練状況も、一月前に実施された海軍空挺部隊の初の空挺作戦すら徹底的に秘匿すると共に、攻撃部隊の隊員を国内最大級且つ最新鋭の日石の横浜製油所に派



遣して製油所について学ばせ、また彼等も研究に研究を重ね、自信を得た。当時日本一の石油専門家玉置氏の復旧の方策等に関する意見を徴し、氏等の石油専門家を本属のまま軍属として、上陸提携部隊である師団に属させ、パレンバンに逸早く進出できるように処置した。また、採油部隊を開戦前に密かに日本を出発させ、師団主力と合流させた。降着後、製油所の被災を最小限に止めることができたのは、日本での製油所研修と研究の賜物であった。これらが奏効して、2つの製油所の内一つはほぼ無傷で占領し得た。尚、消防の専門家が、警視庁から派遣されていた。

### 3 復旧

採油部隊(隊長と一部を除きほぼ民間人で組織)、日本で研究していた油性の消火法は役だった。日本から持ち込んだ作井機や簡易蒸留装置も威力発揮。消火と応急の復旧は電気中隊が担当した。パレンバンに残っていた石油技術者は玉置氏の指揮で製油所の復旧に力を注いだ。後続の石油部隊(日本石油の守屋隊、原隊)をも到着し、復旧が進捗した。また、専門家の調査報告は完璧であり、高い評価を受けた。3月には復旧の見通しが立った。予想を上回る復旧であった。

## 4 陸軍南方燃料廠の創設

陸軍占領地域の石油行政を統括する組織で、1942(S17)年3月30日付で編成された。本部と5つの支廠で構成された。この内南スマトラ支廠は、長は少将で、最盛期には、日本人3000人、現地人約20000人の職員を擁していた。これらの職員の中には、日本で急遽募集されて赴任してきた女子事務職員(お嬢さん部隊)もあり、日本国内の製油所からも増員がなされた。昭和18年から「陸軍軍属南方要員」を募集し、現地に配置された。九州医学専門学校長の申し出があって、支廠附属病院が創設された。

- 5 防空、日本国内への環送に大なる問題(潜水艦や敵機の攻撃)があった。また、軍と民との文化や認識の差等或いは軍人の横暴等もあり、真の一体化は難しかったようである。内地への原油還送開始は、1947(S17)年6月である。開戦前の石油取得見積量は二年目100万kℓであったが、パレンバン地区だけで、二年目には360万kℓを生産した。(因みに、開戦時の備蓄量は770万kℓ、開戦後の消費見積として陸海軍のみで380万kℓ/年としていた。)
- \* 還送の不手際が悔やまれる。状況が厳しくなっても密な連携が出来る事が肝要

### 第百六十三話 軍人らしからざる者こそ!

小生の年の離れた従兄は、陸軍中野学校出身者であり、小生学生時代には、彼の息子 (防大の後輩)と一緒に興味そそられる話を聞いたものである。同校は、中野学校の前身 を含めても、7年という短期の存続であったが、その卒業生の果たした功績は至当に評 価されてよい。

### 1 陸軍中野学校の概要

岩畔豪雄中佐の献言で、「防諜研究所」が設立されたのが、1938 (S13) 年3月である。「後方勤務要員養成所」を経て、1940 (S15)年に「陸軍中野学校」と改名された。 当初は、九段の愛国婦人会本部の別棟の仮校舎であったが、翌1939 (S14) 年4月中 野区囲町(現東京警察病院敷地)に移転、空襲の激化に伴い群馬の富岡(現富岡高校)



に移転した。1944(S19)年8月には静岡の二俣に分校 を設立し、遊撃戦要員教育を行った。

二俣分校を含む卒業生総数は2500名余(異説あり)である。学生は、陸士卒、予備士卒、教導学校卒から選抜された。東京帝大を含む有名大学出身者が多かった。軍人らしからぬ点が、進展性と適性ありと評価されたのであろう。

参謀本部の直轄であり、創立当初の目的は、長期外

国滞在型の忍者・御庭番的な要員、交替しない駐在武官として総合的な情報要員育成であったが、戦局の悪化により、特務機関員へそして遊撃要員へと変容していった。教官としては、参謀本部の中堅将校等が派遣された。

### 2 特色等

- (1) 創立目的もあり、その存在も教育内容も秘密性・秘匿性が非常に高かったが、戸籍 抹消云々は所謂都市伝説のようである。唯、偽名の使用は日常的であった。
- (2) 平服、長髪が推奨され、タブーなく自由に議論する校風、飽くまでも生きて任務遂行する至誠の涵養、校外の実習もあり、幅広い教育が行われた。
- 3 卒業生の動向・活躍等
- (1) 大陸方面、南方方面での勤務の他、参謀本部等で勤務した。特務機関の一員として 活動した者も多い。彼等は、機関長から重宝されていた。中野戦士への需要が非常に 高まり、人事担当者が苦労したとも。沖縄戦に参加した中野学校出身者も居る。
- (2) 自らの視察等による兵要地誌や関連情報の入手のほか、女スパイ、売春婦や情報提供者を多数組織化、運用し、所望の情報入手に努力、相応の成果を上げた。最も相手側も同様の罠を仕掛けてきたのは当然で、虚々実々の暗闘が繰り広げられた。戦後、ソ連や連合国側も中野学校の動向に留意し、参考にした。
- (3) 便衣スパイとして行動した者も居り、一匹狼的な行動が多かった。
- (4) 敵に捕らわれることは工作員の宿命であり、露見し殺害された者も多い。彼等が如何なる成果を上げたかは詳らかにはなっていないが、これも秘密情報員の宿命か。
- (5) ルバング島の小野田寛郎少尉、GHQ に潜入工作した田中徹雄大尉の他、東南アジアの独立戦争に携わった卒業生も多数居た。至誠の人、信念の人が中野学校出身者だ。
- 4 中野学校の現代的意味
- (1) 思想戦、宣伝戦は平時における重要な戦いであり、日本には中野学校的な総合的情報将校育成機関が存在しないが、果たして現状で良いのか検討すべきであろう。
- (2) 謀略、諜報、スパイ等、現代の日本人は嫌悪感を有しているが、列国の現状から、 果たしてそんな綺麗事で済まされるものだろうか。意識・認識改革が必要だ。
- (3) 情報要員の育成には時間と金がかかる。長期的視点と視野で育成すべきである。
- \* 我が国はより『情報』に意を用いるべきだろう。

第百六十四話 無抵抗の抵抗:ハバロフスク事件

中野学校関連書籍を読んでいて、中野学校出身者が関わったハバロフスク事件なるものを知り、調べてみた。ソ連抑留者は、その過酷さに10年間耐えに耐えてきたが、遂にその余りもの非道さに、一致団結して立ち上がった。その団長には、中野学校出身の石田三郎(乙 I 長)少佐が推された。彼等は、サボタージュ及びハンガーストライキを敢行して抑留者の要求を勝ち



取ったのである。石田氏は帰国後「無抵抗の抵抗—ハバロフスク事件の真相」(1976年)を著している。(画像: <a href="http://www7a.biglobe.ne.jp/~mhvpip/EseSaiban.html">http://www7a.biglobe.ne.jp/~mhvpip/EseSaiban.html</a> から)

#### 1 事件の概要

1955 (S30) 年 12 月 19 日、生命の危機に直面したハバロフスク第 16 収容所第一分所の抑留日本人 769 名が、非人道的な管理に抗議して、作業拒否と絶食という非常手段に訴えて待遇改善を求めた。然しながら、翌年 3 月 11 日 0 5 0 0、ソ連内務次官ボチコフ中将の無警告武力弾圧によって、統一的集団抗議活動は瓦解した。抗議活動首謀者 46 名は、逮捕、分散収容され、刑を科された。結果的には、待遇の面は改善された。

### 2 抗議活動参加者について

769 名中、旧制高校以上の学歴を持つ者は 92%、平均年齢は 42 歳であったという。 抑留者は、幾つかの班に編成されており、それぞれに班長が居た。抑留者の中には、シベリアの天皇と言われた民主運動のリーダーに率いられたグループもあったが、彼等は 当然抗議運動への参加を認められなかった。

彼等は、抑留されてから 10 年もの間、過酷な労働、給養、ソ連兵の非人道的・威圧 的行為にも耐えに耐えていた。(第百六十一話参照)

#### 2 抗議の切掛けとなった事案

11月26日、ソ連兵は政治部将校の立会の下、営内の軽作業に従事していた病弱者26名を、営外作業に適するとして無理に作業に従事させた。酷寒の重労働であり、病弱者の症状は当然悪化した。更には12月15日、他の病弱者65名にも営外作業を命じてきた。皆が必死に請願するも聞き入れることはなかった。病弱者殺害が目的だったとしか思えないと感じた。

# 3 対応を班長会議で決定

皆一緒に日本に帰ることを夢見て励ましあい、力を合わせてきたのだが、仲間を死なせる訳にはいかない、これ以上我慢が出来ないとの気運が生まれ、班長会議で対応を議論した。収容所側に誠意ある対応が期待できないのであれば、自滅するよりは闘おう、座して死を待つは日本人の恥だとの認識で一致した。如何に戦うかを検討した結果、「作業拒否、一致団結、要求事項の決定」、戦術的には「暴力は使わず、収容所側を過度に刺激せず、請願運動と呼称、秘密の顧問団(瀬島龍三等)」と決定した。尚、瀬島氏のアドバイスで、ソ連の中央政府、マスコミ、赤十字への請願文書送付を行った。

# 4 抵抗運動とソ連軍の武力弾圧

ソ連の硬軟取り混ぜた懐柔策・圧力にも屈することなく粛々と作業拒否運動を行った。更には、病弱者を除く506名が断食に入った。3月11日、内務次官の率いる兵2500名と消防車8台が突然現れ、引きずり出された。代表たる石田は、毅然として中将に意見を述べた。次官からは"追って結論を出す"との言質を得た。首謀者には禁固1年の刑が科されたが、収容所は改善され、形の上では屈服したが要求は通った。

- 5 最後のシベリア抑留者の日本帰還 1956(S31)年11月26日
- \* 国際情勢の変化もあったのだろうが、彼等が示した団結、毅然たる対応、気概そして 採用した戦術が奏功したのだろう。極限における人の生き様を示している。

### 第百六十五話 自らの非を認めたことは評価できる!

南方石油関連書籍を読んでいて、阿波丸事件を知った。同事件は、1945 (S20) 年 4 月 1 日シンガポールから日本に向けて航行中であった貨客船阿波丸が、米海軍の潜水艦の雷撃により撃沈され、2000 人以上の乗船者の殆どが死亡した事件である。阿波丸は日米間の協定で安全航行を保障されていたにも拘らずに撃沈されたのである。

## 1 赤紙ならぬ白紙で徴用された石油関係者數

赤紙は云わずと知れた召集令状であるが、「白紙」と言われたのは徴用令状である。 上述の書籍によれば、南方の石油施設運営のために動員(白紙徴用)された徴員数は、 陸軍約 4900 名、海軍約 7000 名に及んでいるという。(閑話休題)

### 2 阿波丸事件の経過概要

米及び連合軍の要請を受けた赤十字の仲介により、日米双方の捕虜・拘束民間人への 救援物資を交換する協定が締結された。当時米国は無制限潜水艦戦を行っており、日本 側は輸送に使用する船舶の安全航行の保障を求めた。米国は安全航行を確約した。

米国の救援物資 2000 トン余りはナホトカで積み込まれ、日本に持ち帰られ、内 800 トン(or1600 トン)は南方の捕虜収容所向けであり、その輸送担当に選ばれたのが数少ない優秀貨客船であった阿波丸(11249t, 16kt)であった。阿波丸は船体を白一色に塗装、両舷及び煙突に白十字のマーク、夜間照明可能、武装取り外し、病院船に準ずる「緑十字船」とした。同船は、1945(S20)年2月17日門司を出発し、積み荷を所定の港に卸下し、シンガポールから日本に帰ることとなった。阿波丸は日本に帰る最後のチャンスであり乗船希望者が殺到した。乗客は商船員、非戦闘員、軍人・軍属等 2000 余名であった。他に戦略物資を 2500 トン積載していた。米軍は暗号解読でその状況を承知していた。3月28日にシンガポールを出発、4月1日、これから台湾海峡に入るとの連絡を最後に消息が途絶えた。この時、米17機動部隊所属の潜水艦クィーンフィッシュによって撃沈させられていた。救助者は僅かに一名のみであった。

日本政府は4月12日スイス政府経由で承知し、責任ある説明を求め、抗議すると共に損害賠償を求めた。7月5日、米国は阿波丸撃沈の責任を認め、賠償問題は戦争終結まで延期と提案した。

## 3 賠償問題の行方

戦後、日本側の賠償請求に対し、マッカーサーが強く拒否したので、賠償請求権を放棄する代わりに有料食糧援助増額案を示され、日本政府もこれに同意し、1949 (S25)年4月14日「阿波丸協定」が締結された。

## 4 攻撃の理由等

潜水艦隊司令官は、阿波丸が軍事物資を搭載しており、正当な攻撃目標であると攻撃許可をミニッツに要請している。同潜水艦への攻撃禁止命令の確認が遅れた。ミニッツの返答なきを黙認と受け取ったとの説もある。位置情報伝達も間に合わなかったとも云われる。艦長は軍法会議にかけられた。攻撃目標を目視確認もせずに攻撃するのは言語道断だ。潜水艦による攻撃は人為的なミスであると云える。

### 5 慰霊碑等

芝の増上寺境内に「阿波丸事件殉職者之碑」がある。 日本政府は、死亡者一人当たり7万円の見舞金を遺族 に支給(1950年)

沈没阿波丸から遺骨 368 柱、遺品 1683 点が、中国から 日本に返還された。尚、積載が噂された金塊等は発見さ れていない。



\* 絶対安全航行保障と軍事・戦略物資積載、米軍の不手際・ミス、某国等と違うのは自 らの非を米国が認めたことだろう。

## 第百六十六話 総力戦下の技術と非人道性

風船爆弾(第八十二話参照)等を調べている際に、「登戸研究所」が頻出し、登戸研究所が気になり、調べたくとも適当な資料がなかった。偶々、市の図書館で「陸軍登戸研究所<秘密戦>の世界」(山田朗編 明治大学出版会)なる書籍を見つけた。該本



に依拠しつつ、登戸研究所について、その概要を記したい。

#### 1 大東亜戦争時の陸軍の研究体制

陸軍兵器行政本部隷下に、10個の技術研究所が置かれていた。 概要下表

研究所名	所在地	研究分野	研究所名	所在地	研究分野
第一	小金井	鉄砲・弾薬・馬具	第二	小平	観測・指揮連絡兵器
第三	小金井	器材·爆破用火薬具	第四	相模原	戦車・自動車
第五	小平	通信兵器	第六	百人町	化学兵器
第七	百人町	物理的基礎研究	第八	小金井	兵器資料
第九	登戸	秘密戦兵器・資材	第十	姫路	海軍資材

第九陸軍技術研究所がその研究分野から特異な組織であったことが窺える。

## 2 登戸研究所の沿革等

WW I 終結後の 1919(T8)年陸軍科学研究所が設置され、登戸には秘密戦資材研究室、研究所実験場を経て、1939(S14)年に「登戸出張所」が設置された。1942(S16)年に「第九陸軍研究所」となった。戦争末期には長野県内に移転した。

研究所は、敷地面積 11 万坪で、現在の明治大学生野キャンパスを含み、その倍以上の面積であった。最盛期、建物約 1 0 0 棟、所員約 1 0 0 0 名であった。1 科から 4 科があり、科長は大佐である。各科の研究項目等は次の通りである。

第1科:風船爆弾、宣伝用自動車、特殊無線機、怪力電波、殺人光線、人口雷等

第2科:科学的秘密通信法、毒物合成・犬まよい剤、毒物謀略兵器、

対動物謀略兵器(家畜用細菌兵器)、耐水・耐風マッチ、諜者用カメラ、

対植物謀略兵器 (穀物用細菌兵器) 等

第3科:贋札(偽札)の製造 第4科:略

実用化、実戦使用された「風船爆弾」や「国民政府発行紙幣(法幣)」等はあるが、 残念ながらと云うべきか、政府が期待したような戦局を大転回させる兵器誕生には至ら なかった。これらの研究内容を米軍は夙に承知しており、日本占領早々に接収を期した が、重要書類や関連資機材は破却されていた。後ほど司法取引をして関係者からの聞き 取り調査をした。その成果が爾後の米軍の戦争で示された?

# 3 トピックス等

- ①怪力光線:強力な超音波を照射して物体や人体を殺傷する兵器、実用化に至らず
- ②超短波レーダー:超短波を使用したレーダー、米軍は短波使用
- ③熱線利用射撃管制装置:標的が発する赤外線等を感知して射撃
- ④有線操縦兵器:小型戦車等を有線操縦してトーチカ等を破壊
- ⑤007が装備しているような各種装置 秘密インキ、秘密カメラ、超縮写器材等
- ⑥様々な動物実験(動物慰霊碑あり)、他の研究機関・大学・企業ネットワーク構築
- ⑦大量毒物殺人事件である帝銀事件(1948/1/26)で使用された毒物は登戸研究所で製造された青酸ニトリルが使用されたとの説もある。

非人道的な兵器の研究開発を非難するのは容易だが、総力戦下での技術の役割は如に あるべきかを問うべし。先制使用はせずとも、防衛上は万般に研究を行い対応を準備!

(第百六十六話 了)

## 第百六十七話 一縷の望みもなかったのか?

大東亜戦争を知れば知るほど悔やまれるのは、第一段南方作戦終了後の戦略として、 引き続きその占領地域の拡大を図ったことだ。為に戦面が拡大し、結果的には米軍の蛙 飛び作戦に翻弄され、消耗戦に陥り、破局にまっしぐらに向かってしまった。当初の構 想通りに戦っていたとしたら、結果的に日本は負けたとしても、戦局は相当異なったも のとなり、破滅的な敗戦は避けられたかもしれない。

### 1 当初の第二段作戦指導構想

開戦前には、明確な戦争指導計画はなく、第二段作戦構想を知りうるのは、昭和16年11月13日大本営政府連絡会議で決定された「対米英蘭戦争終末促進に関する腹案」である。それによれば、南方要域攻略後は「西太平洋における政戦両略上の長期不敗態勢」を確立して長期持久の態勢を整えることとなっていた。

## 2 実際の第二段作戦

第一段作戦においては、その作戦目的も占領すべき範囲も陸海軍間に差異は無かった。然しながら、予期以上の第一段作戦の進展により、陸海軍間の内包する思惑が表面化してきた。陸軍は、大局的には開戦前に定めた戦争指導構想の通り、長期持久の態勢に転換することを企図していた。海軍と連合艦隊は、初期進攻作戦の成果を拡大して、太平洋正面への攻撃続行を検討していた。軍令部は豪州の孤立化等による英国脱落と広域の要撃態勢確立を、連合艦隊は、中部太平洋における早期の対米決戦による短期戦化を目指していた。

これらの基本的な考え方の相違を残したまま、初期作戦成功後の戦争指導構想を検討、3月7日「今後採るべき戦争指導の大綱」を決定した。正に妥協の産物であるそれは、「長期不敗の態勢を整えつつ機を見て積極的の方策を講ず」とした。

海軍の第二段作戦の重点は、太平洋正面に指向され、特に連合艦隊は、米国の早期屈服を目指すハワイ攻略作戦を念頭にミッドウェー攻略作戦に突き進んでいった。

不幸なことに戦争指導構想の分裂である。陸海軍間、軍令部と連合艦隊の考え方が一致しないままだった。

#### 3 長期不敗態勢

連合艦隊が行ったミッドウェー作戦やガ島への 飛行場建設等は長期不敗態勢確立には無縁な作戦 であった。その事後に及ぼした影響の甚大さを考 えると悔やまれる。

長期不敗態勢確立には①昭和18年9月に定められた絶対国防圏を当初から指定して不沈空母と化した一大要塞群 ②内地と南方資源地帯との海上交通路の確保措置(船団護衛措置) ③陸軍部隊の大幅な増強、陣地構築(洞窟陣地化)準備の推進、



所要の物資集積(陸軍は、太平洋は海軍担当と冷ややかだった?) ④航空機や船舶の増産 ⑤米軍反攻を遅らせるための潜水艦部隊による通商破壊や艦艇攻撃 ⑤連合艦隊の 泊地の整備と防護等が必要であり、それは可能だった筈だ。

# 4 結果的には敗けたとして敗け方には大きな違いがあったのでは?

戦争初期には、米国も太平洋正面は次等正面であり、日本が万全の不敗態勢を構築していたならば、易々とは来襲し得なかっただろうし、その間に和平の糸口を掴めたかも知れない。軍事的に米国を屈服できないとしても敗け方は選べただろう。

海軍と陸軍の戦略思想の差異はあるのだろうが、何れにしても徹底的に議論せず、文言の妥協で御茶を濁す日本的な解決策は極めて問題だし、その場合に大所高所から裁定する戦争指導者の不在(天皇は無答責であり、天皇以外の戦時リーダー)も問題にされるべきだ。

### 第百六十八話 ノモンハンの真実!

ノモンハン事件で日本軍は近代的なソ連軍に完敗し惨憺たる結果であり、日本はそれ さえ隠蔽したと長らく言われてきた。然し、ソ連崩壊後の情報公開によって、日ソの損 害が明らかになり、事実は巷間言われているのとはかなり違うと云うことが解ってき た。

### 1 ノモンハン事件の概要

1939 (S14) 年5月から同年9月にかけて、満州国とモンゴル人民共和国の間の国境線をめぐって発生した紛争をノモンハン事件と呼ぶ。満州国軍とモンゴル人民軍の衝突に端を発し、両国の後ろ盾となった大日本帝国陸軍とソビエト労農赤軍が戦闘を展開し、一連の日ソ国境紛争のなかでも最大規模の軍事衝突となった。

ノモンハン事件は、第一次(1939年5月~6月)と第二次(同年7月~9月)の二期に分かれる。第一次事件の勝敗は五分五分で、第二次事件はボロ負けと言われる。

2 ノモンハン事件の日本軍の人的損害

事件後に日本軍第6軍軍医部が作成した損害調査によれば、戦死7,696人、戦傷8,647人、行方不明1,024人であり、合計17364人である。終始戦った23師団の死傷率は68%と極めて高い。

参考までに 戦車・装甲車の損害:日本軍 36/92 、ソ連軍 損失数約 400

航空機の損害:日本軍 179機 ソ連軍 251機

3 ソ連軍の人的損害

ソ連は、イデオロギー的な宣伝の為もあって、日本側の 死傷者数を大きく膨らませる一方、自軍の人的損害を故意に小さく見せようとしてき た。

○ソ連側資料に見る日本軍の人的損害

1939 (S14) 年 11 月 15 日ソ連第一軍集団参謀部提出の報告書には、7,8 月の戦闘だけで、44,768 人としている。その後の資料ではそれが更に増えている。

○ソ連側資料に見るソ連軍の人的損害

1939 年 11 月のジューコフ報告書では、死者・行方不明 1,701 人、戦傷 7,583 人の計 9,284 人となっている。

然しながら、ソ連崩壊後の 2001 年に公開された「20 世紀の戦争におけるロシア・ ソ連:統計的分析」によれば、死者・行方不明 9,703 人、戦傷 15,952 人の計 25,655 人である。ソ連軍の死傷率は約 35%であり、相当に高いというべきだ。

尚、参考までに、停戦後 10 月 17 日に日本の参謀本部作戦課がまとめた報告書では、ソ連軍の死傷者は 20,000 人前後と捉えており、かなり正確だった。

# 3 評価

ソ連軍の人的損害は、日本軍のそれを上回っており、日本軍は、巷間言われているほど惨敗した訳ではなく、相当健闘したことが窺える。ノモンハン事件も見直される必要があるだろう。但し、戦争目的を実現できなかった日本の敗北であることに違いはなく、この戦闘で得られた貴重な教訓が活かされなかったのは残念だ。近代的な軍隊の洗礼を浴び、それを国軍建設に活かすには国力の問題も時間の問題も或いは面子の問題もあったのか?

4 ソ連軍のみならず、関係国の情報公開の促進を

日本は敗戦後関係書類を焼却しており、事実確認に支障を来している。ソ連は、ノモンハン事件に限らず、日本人抑留者や死亡者に関する情報の公開が遅れており、米国もどうも都合の悪い関係文書の公開を躊躇しているような気がしてならない。

\* 戦いの正当な評価には、宣伝ではなく事実が明らかにされるべきだ。

## 第百六十九話 戦場の武士道精神!

日本陸軍は、ガ島、ニューギニア、インパール、サイパン、比島、硫黄島、沖縄、そして占守島において悲壮な玉砕に見舞われた。その玉砕の戦場から奇しくも生還した兵士の体験・手記は涙なくして読めない。殺し・殺されるという極限下である戦場の惨さに狼狽し、死に直面した人間の生き様を思い、その運命を分けたものが何だったのか等々考えさせられることが多々ある。そのような戦場においても、時には憎き敵同士であっても、武士道的、騎士道的とも云うべき心温まる美談がある。「太平洋戦争、最後の証言」からそれを紹介する。(53p~56p を要約)



### 1 ラバウル攻略作戦の概要

帝国海軍主要基地であるカロリン諸島のトラック諸島に近いニューブリテン島のラバウルとニューアイルランド島のカビエンは重要な拠点とみなされていた。1942 (S17) 年1月中旬以降、日本海軍の南洋部隊の支援を受けた、第十九戦隊司令官志摩清英海軍少将をラバウル攻略の指揮官に任命して攻撃を開始した。日本陸軍の南海支隊(指揮官堀井富太郎陸軍少将)が、攻略部隊の主力であった。1月23日、南海支隊と海軍陸戦隊の攻撃によりラバウルとカビエンは陥落、オーストラリア軍は抵抗少なく降伏した。

ラバウルの港を占領した後、日本軍はこの港を大規模な基地とし、また航空基地を整備した。その米軍によるラバウル空襲(1943/11)、米軍のニューブリテン上陸(1943/12)や豪軍の上陸(1944/11)があったが、ラバウルは終戦まで健在し、69,000人の兵士が居た。

## 2 豪軍による墜落日本海軍パイロットの埋葬

部隊の先頭がラバウルの市内に前進したが、敵豪軍の抵抗はなく、訝しく思った。暫くして、豪兵が道に一列に並んで敬礼をしていた。その各人の足元には、きちんと武器が置かれている。豪兵約1000名が捕虜となった。その捕虜と親しくなったN達に対し、身振り手振りで説明するには、日本軍が上陸した1月23日の前日日本海軍の偵察機がラバウルの近くの山に墜落したが、彼等が二名の日本海軍パイロットを、きちんと穴を掘って埋葬したという。

豪捕虜の話を聞いたNは、海軍航空隊の隊長にそのことを伝えた。海軍側がその現地に行ってみると、埋葬され、しかも墓標まで立ててあったと云う。

日本軍では、{豪軍には武士道精神があるぞ}と話題になり、豪軍捕虜を虐待してはならないという通達が出されたという。

# 3 感じ入った日本軍の特例措置

豪軍兵士の墜落兵士の取扱に感激したNは、{捕虜に家族への手紙を書かせる。}ことを思いつき、海軍の隊長に相談したところ、その隊長がそれは面白い、是非やろうじゃないかと賛意を示してくれた。相手の紳士的態度に我が方も紳士的対応で応じようというのである。粋な計らいだ。

露見すれば厳罰ものであるので、捕虜にはその旨を言い含め手紙を書かせた。それを 纏めて爆弾代わりにポートモレスビーの上空から豪軍基地に落とした。S17年4月頃。

#### 4 その手紙のその後の消息

その豪軍捕虜は、日本へ輸送される途中で船が撃沈されて落命した。戦後、豪の関係者に調べて貰ったら、郵便袋4つを拾ったとの豪軍資料があった。家族に届いたのか更に調査を継続したところ、調査をお願いしていた豪大使館員から連絡があり、その手紙を受け取った人を見つけたということだった。その手紙を大事にしていた母親は亡くなっていたが、今も母の宝物として大事に保管していると云う。時は既に平成22年也。

\*戦場には時に美しい花が咲く。厳密にいえば処罰ものだろうが、あっても良い。清涼剤 (第百六十九話 了) 第百七十話 生等もとより生還を帰せず!

(「第八十五話 国家存亡の危機時の非常措置:学徒出陣」関連)

第八十五話で説明した第一回出陣学徒壮行会は、1943(S18)年10月21日に明治神宮外苑競技場で行われた。学徒壮行会は、冷たい秋雨が降りしきる中、首都圏の77校が参加して行われた。東京帝国大学文学部学生の江橋慎四郎による答辞を紹介する。



#### 1 答辞全文

『明治神官外苑は学徒が多年武を練り、技を競ひ、皇国学徒の志気を発揚し来れる聖域なり。本日、この思ひ出多き地に於て、近く入隊の栄を担ひ、戦線に赴くべき生等の為、斯くも厳粛盛大なる壮行会を開催せられ、内閣総理大臣閣下、文部大臣開下よりは、懇切なる御訓示を忝くし、在学学徒代表より熱誠溢るる壮行の辞を恵与せられたるは、誠に無上の光栄にして、生等の面目、これに過ぐる事なく、衷心感激措く能はざるところなり。

惟(おも) ふに大東亜戦争宣せられてより、是に二星霜、大御稜威の下、皇軍将士の 善謀勇戦は、よく宿敵米英の勢力を東亜の大地より撃壌払拭し、その東亜侵略の拠点は 悉く、我が手中に帰し、大東亜共栄圏の建設はこの確乎として磐石の如き基礎の上に 着々として進捗せり。

然れども、暴虐飽くなき敵米英は今やその厖大なる物資と生産力とを擁し、あらゆる 科学力を動員し、我に対して必死の反抗を試み、決戦相次ぐ戦局の様相は、日を追って 熾烈の度を加へ、事態益々重大なるものあり。

時なる哉、学徒出陣の勅令公布せらる。

予ねて愛国の衷情を僅かに学国の内外にのみ迸しめ得たりし生等は、是に優渥(ゆうあく)なる聖旨を奉体して、勇躍軍務に従ふを得るに至れるなり。 豊に感奮興起せざらんや。

生等今や、見敵必殺の銃剣をひっ提げ、積年忍苦の精進研鑽を挙げて、悉くこの光栄 ある重任に獻げ、挺身以て頑敵を撃滅せん。

生等もとより生還を帰せず。

在学学徒諸兄、また遠からずして生等に続き出陣の上は、屍を乗り越え乗り越え、邁往敢闘、以て大東亜戦争を完遂し、上宸襟(しんきん)を安んじ奉り、皇国を富岳の寿きに置かざるべからず。

斯くの如きは皇国学従の本願とするところ、生等の断じて行する信条なり。

生等謹んで宣戦の大詔を奉戴(ほうたい)し、益々必勝の信念に透徹し、愈々不撓不屈の闘魂を磨礪(まれい)し、強靭なる体躯を堅持して、決戦場裡に挺身し、誓って皇恩の万一に報い奉り、必ず各位の御期待に背かざらんとす。

決意の一端を開陳し、以て答辞となす。

昭和十八年十月二十一日

- 2 その節の「生等、もとより生還を期せず」は有名な言葉である。答辞は教授の添削を 受けたが、「生還を期せず」は自ら考えたものだった。
- 3 江橋慎四郎氏略歴

1920(T9)年6月、鎌倉市生まれ 東大在学中に学徒出陣、戦後、文部省体育局勤務などを経て、東京大学教授。その後鹿児島大学教授や中京大学教授を歴任した。さらに、日本初の国立体育系単科大学である鹿屋体育大学の創立に尽力し初代学長となる。定年後は東京大学名誉教授となる。2018年4月8日、心不全のため死去。97歳没。

\* 答辞については、長らく黙して語らなかったという。 "生還を期せず" と明言せるに も関わらず生き残ったことに忸怩たる想いがあった?

(第百七十話 了)

### 第百七十一話 無慈悲・徹底的な日本破壊作戦!

先に、第五十四話で「本土無差別空襲は戦争犯罪そのものだ!」と書いたが、その後 米国戦略爆撃調査団がまとめた報告書関連書籍を読んで、米軍による本土空襲が、無差 別ではなく極めて緻密に明確な目的・目標をもって徹底的に行われていたことを知っ た。無差別と称するよりも無慈悲徹底的な日本破壊作戦と称する方が妥当な気がする。

#### 1 空襲目標都市について

先ず、東京、名古屋、大阪の三大都市を空襲目標都市とし、その後中小都市に目標を 転換した。3月10日:東京、破壊率51% 3月12日:名古屋、31%、14日:大 阪、37%であると報告書は述べる。大阪空襲は成功モデルになったと云われる。

更には、神戸、横浜を灰燼にした後、6月以降地方の中小都市に目標転換をした。

#### 2 効果的な爆撃要領の選択

日本の対空・迎撃能力にもよるが、攻撃目標の特性に応じ、白昼高高度精密爆撃、夜間低高度焼夷弾爆撃を選択し、爆撃中心点(照準点)をまず爆撃後にその周囲に定型的に爆撃した。消火活動を妨害するために時間差爆発すべく時限設定した。当初は、軍事施設や軍需工場をピンポイントで精密爆撃していたが、効率が悪いので住宅地を一気に焼滅させ都市機能を奪う焼夷弾攻撃へと舵を切った。

軍需目標には爆弾を使用し、民家・住宅地には焼夷弾を使用した。住宅密集地域もその度合いを仔細に分析して爆撃に活用した。これらは効果的な爆撃を考えると当然だ。

- 3 目標特性に応ずる各種の爆弾の開発と使用
  - ○通常爆弾
    - 4.5 トン爆弾(1 万ポンド爆弾、パンプキン)
    - 2 トン爆弾(4000 ポンド爆弾)、
    - 1 トン爆弾(2000 ポンド爆弾)、500 キロ爆弾、250 キロ爆弾
  - ○焼夷弾

油脂焼夷弾、

エレクトロン焼夷弾(テルミット・マグネシウム爆

機銃掃射も頻繁に行われた。米軍の徹底振りが窺われる。

弾):神戸空襲で使用

集束弾 (38 発の子弾の油脂焼夷弾、110 発の子爆弾のエレクトロン焼夷弾)

- ○破片爆弾(クラスター爆弾の原型)が消火活動妨害目的で使用された
- 4 高い破壊率(計画目標区域内の目標破壊の程度)

東京、名古屋、大阪以外では、神戸:56%、横浜:44%、堺:43%、仙台:27%、福岡:22%であると云う。富山市の破壊率は99.5%という驚異的な数字である。米軍が如何に徹底的に破壊せんとしていたか、その頃の日本が如何に無力であったかが明らかだ。

5 天候に左右された空襲

当時の航空機の能力、レーダーの能力では天候(雲量含む)を克服しての爆撃は容易ではなかった。爆撃機の1割以上が目標に到達出来なかったとも。勿論、米軍は気象観測を重視していたのだが、・・

6 機雷敷設も実施、今に続く不発弾処理

餓死作戦と名付けて、日本の海峡や港湾に大量の機雷を 46 回に亘って投下した。投下機雷数は一万発と言われ、敗戦後にも蝕雷事故が起き、安全宣言が出されたのは 1952 (S27) 年である。機雷ではないが、今なお工事現場では不発弾が発見され、自衛隊の不発弾処理隊が処理している。平成 29 年度の実績(陸上):1,611件、処理重量約49.5トンで、(海上)機雷等の処理個数は12個及び処理重量は約1.8トン7 帰りがけの駄賃で爆弾を落とされた和歌山県串本町、最終段階では空母艦載機による



### 第百七十二話 天皇免責と引き換えに東条に責任を!

ヒットラー、ムッソリーニと並んで天皇は自由世界の敵と目されており、戦争責任を 問う声は世界各地で澎湃として起こっていた。天皇の免責が必要と考えた知日派米陸軍 准将の活躍があって、昭和天皇の不訴追が確定した。その代償として、東条元首相を始 めとする軍事指導者に全ての責任を負わせることとなった。日本語版と英語版の二つの 独白録がそれを物語る。直筆原本が 2017 年競売落札され、宮内庁に寄贈された。

# 1 二つの独白録

文藝春秋 1990 (H2) 年 12 月号で「昭和天皇独白録」が公表され、大きな話題を呼んだ。当時から日本語版とは別の英語版があるのではとの議論があった。その後、NHK が取材の過程で、マッカーサーの軍事秘書で、バターンボーイズの一人でもあった、GHQの民間情報教育局の前身たる心理作戦部を指揮したフェラーズ准将遺族の保管文書の中から、1996 (H8) 年 5 月に英語版の独白録が発見された。

## 2 独白録の作成の背景等

英語バージョンが発見されたことで、「独白録」は天皇免責の為の弁明書との性格が強かったと考えられる。英語版と日本語版の二つが存在するが、その底本は、内記部長稲田周一の作成した「速記録」であろうと推察されている。

昭和天皇への聞き取りは、敗戦から半年余り過ぎた 1946(S21)年3月18日から4月8日まで計5回8時間以上に亘り、皇居御文庫の

一室で行われた。参集した側近は5人、宮内大臣、宗秩寮総裁、侍従次長、内記部長及 び御用掛である。

時は正に所謂戦争犯罪人の逮捕が相次ぎ、米国でも天皇を裁判に掛けるべしとの世論が強く、ソ連や豪州も天皇の責任を問うべきとの立場であり、天皇側近や政府更には知 日派のフェラーズ等は危機感を募らせていた。

# 3 フェラーズの東京裁判対策

フェラーズは、彼が指導した対日心理作戦の成果報告を纏めるに際し、戦争指導者を尋問した。その過程で、天皇の終戦の御聖断を高く評価するようになり、天皇を免責すべきであるとの理解に達した。最もそれを強調するのが日本側の作戦でもあった。悩ましいのは、終戦に際して指導力を発揮し得たのならば、開戦時にも指導力を発揮すべきであり、その責任はどうなるのかであった。フェラーズは、米内元海軍大臣を通じて、全ての責任を東条元首相と嶋田元海相に全責任をとらせるべしと示唆し、東条もそれを受容した。フェラーズの示唆は、天皇の無罪を日本側で立証、戦争責任を東条ら軍の指導者に負わせるということであり、東京裁判も日本の国内改革もこの基本的な考えのもとに推進された。御用掛の寺崎氏の手になる英語版が1946(S21)年4月にフェラーズに届けられた。

# 4 英語版独白録の特色

英語版は、日米開戦までの経緯に絞り込まれており、軍国主義者達と天皇がどのような関係であったかについて天皇に語ってもらうとの趣旨で、開戦阻止が出来なかった弁明に焦点がある。

英語バージョンをマッカーサー元帥が読んだか否かについては明らかではないが、読んでいたと考えるのが妥当だろう。フーバー元大統領やマッカーサーの顧問であったジョージ・アチソン等も読んだ可能性があると推定される。

## 5 東京裁判天皇不訴追決定

米国の天皇免責を決定的にしたのは、マ元帥のアイゼンハワー陸軍参謀総長宛の電文 (1946/1/25)であり、この電文の内容はフェラーズの覚書を下書きにしている。

\* 天皇訴追は、日本は大混乱に陥れたと確信する。フェラーズには感謝だが、・・

### 第百七十三話 無様な自決未遂の意味するもの!

阿南陸相の割腹自殺、宇垣中将の特攻自決等、軍事・政治指導者の自決が相次ぐ中、1945(S20)年9月11日、開戦時首相であった東條大将の自決未遂事件が起きた。東條大将は米軍の徹底的な治療の甲斐もあり一命を取り止め、東京裁判でA級戦犯とされ、翌々年12月23日(当時の皇太子の誕生日)に死刑を執行された。東條大将が処刑された日、天皇は一晩中涙したと云われる。この自決未遂事件の真相は闇の中ではあるが…

## 1 自決未遂事件の顛末

9月10日、マ元帥は戦争犯罪人に関する指令を発した。翌11日、マスコミは、東條逮捕をスクープすべく東條宅に集まった。MPの示す逮捕状を確認した東條大将は、応接間の椅子に座り、右手に持った拳銃で自らの胸を撃ったとみられる状況で発見された。午後4時17分頃。急所は外れている模様だった。東條を殉教者にするなとのマ元帥の指示で、米軍による最高レベルの手術と看護により、奇跡的に九死に一生を得た。



## 2 自決未遂事件に係る論争

# (1)批判や擁護論

- ・自決狂言説・武人にあるまじき失態・潔く15日に自決すべきだった。
- ・何故、拳銃を使用したのか ・死に損なうとは情けない。・卑怯未練がましい所業
- ・自決せずに堂々と裁判で主張すべきを主張すべき ・国中挙げて東條大将に責任押し付けの傾向加速 ・MP 来宅時の自決は生を盗むに似たり ・醜悪
- ・使用拳銃の選択の適否 ・家庭の身辺整理もし、周到に準備
- ・瀕死の状態で新聞記者に長口舌の遺言は茶番劇
- ・大将は、戦陣訓の公布者として死ぬべきと思っており、自決は本気 何れにしろ、大将の自決未遂が報じられると、東條叩きがエスカレートし、東條大将 の悪者イメージが固定化した。
- (2) 東條は、前々日の9日、最後の陸相であった下村定大将と長時間にわたり会談した。東條大将自決の覚悟を聞き知った陸相は東條大将を呼んだのである。陸相から陛下に御迷惑を及ぼすべきではないと諭されたと云う。
- (3) 笹川良一氏の示唆

笹川氏は、正義の戦争であったことを堂々と主張することと、開戦の責任は東條大将にあり天皇にはないことを表明すべきであると示唆していた。

- (4) GHQ フェラーズ准将の米内海相を通じての示唆(前第百七十二話関連)
- 3 無様な自決未遂事件の謎解き

名誉を重んじる東條大将の無様としか言いようのない自決未遂事件が、今一腑に落ちなかった。ある本に東條大将は明暦の頃の町奴仁佐が、奉行から"格好良い死に方をされて後に続く町奴が出たら困るので、それを防止するためにも、見苦しい死に方をしてくれ"との懇望を受けて、その通りの処刑を受けたとのエピソードを思い浮べ、自らも仁佐と同じく無様な独裁者を演じたのだろうとあった。この文を読んで、そう考えれば、全ての謎が氷解し、小生の腑にストンと落ちた。

(参考文献「転進 瀬島龍三の「遺言」116p」)

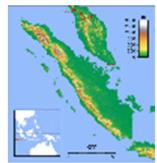
東條大将を美化しすぎだとの非難もあろうが、そうでも考えないとあの無様さは酷すぎる。東條大将は東京裁判では熱心にメモを取り、宣誓供述書も堂々として立派で、「カミソリ東條未だ衰えず」の観があったという。東條大将はスケープゴートにされたと 云えよう。

\* そろそろ名誉回復すべき秋ではなかろうか!

第百七十四話 その名も悲し、「恋飯島」(レンパン島)

大東亜戦争終戦直後、南方地域には、120万人もの将兵及び民間人が所在していた。 陸海軍将兵はポッダム宣言によって、本邦に帰還せしむることとなっていたが、日本軍 を管理した英、蘭、米及び豪には色々な思惑があって、南方地域からの帰還は区々であ り、大変なご苦労をお掛けした。それらについては次話等で書きたい。本話では、「恋 飯島」と呼ばれた捕虜収容所について述べる。「飯が恋しい島」、その捕虜収容所の実 態が感得されるではないか。

1 無人島レンパン島等を捕虜収容所(中間集結地)に指定 南方軍地域を管轄したのは、英軍、蘭軍、米軍及び豪軍 である。うち、英軍はビルマ、マレー、シンガポール及びタ イを管轄した。当該地域には約70万人に及ぶ日本軍将兵・民 間人が所在していた。英軍は、日本移送のための中間集結地 を定め、その一つに無人島であるレンパン島やガラン島など を指定した。



2 レンパン島について

レンパン島は、インドネシアのリアウ諸島州に属する島である。リアウ諸島内の主要な島の一つであり、バタム島の南に位置している。面積は165.83平方キロメートル。北のバタム島および南のガラン島とは橋で結ばれている。赤道直下に位置し、植生は熱帯雨林に覆われている。マラッカ海峡、シンガポール海峡に近く、シンガポール南方60kmの沖合にある蘭領の無人島である。

3 抑留人員数

資料により、様々なデータがあって確定できないが、増田弘著「南方からの帰還」 (慶大出版会 2019 年) に掲載されている英陸軍省のデータでは、レンパン・ガラン 96,911 名 (1946/4/13 現在) となっている。運よく生き長らえたものは一年後に帰還で きた。

### 4 抑留の実態

(1) 英軍の無人島利用の思惑等

レンパン及びガランの両島は、第一次大戦中にドイツ人捕虜二千名が送り込まれ、マラリアで全滅した日く付きの島である。英軍の思惑は、孤島に捕虜を隔離すれば、脱出は不可能であり、警備も不要となる。この為、苦しい台所事情の英国には最適の方法であった。あとは日本兵が開墾を急ぎ、自給自足できるか否かであり、例え日本兵がマラリヤ熱に倒れてもそれは連合軍の責任ではなく、南洋地域では一般的死因だから批判されることもない。一石二鳥、三鳥の良策として実施されたのである。」(前掲書30p)と前掲書は指摘している。

(2) ウィキペディアでは

「連合国軍は十分な食料を支給せず、日本軍兵士は島に生息する鼠や蛇、サソリまで食べて飢えをしのぎ、「恋飯(れんぱん)島」と呼んだ。」と。

(3) 前掲書では、ある兵士の証言として、

「狭いレンパン島に七万もの兵隊が入ってきたので野菜代用の野草、海草、木の芽など二から三日で取り尽くしてしまった。・・・一日(米)百グラム、小さな湯飲み茶碗ぐらいで、これではとうてい足りない。皆真剣になって栄養カロリーの取れる魚、野草、海草を集めるのに苦労した。」と

(4) 労苦体験手記 軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦(兵士編) 同様体験記を以下の URL で確認できる。

https://www.heiwakinen.go.jp/shiryokan/heiwa/06onketsu/0\_06\_030\_1.pdf

\* 報復とは言えここまで惨くなれるものか!

## 第百七十五話 国民性の差なのか、復讐心の裂度の差か!

抑留と云えば、ソ連によるシベリア抑留(約60万人)は夙に 人口に膾炙し、その過酷さは万人の知るところである。一方、 終戦時、南方地域で抑留された日本軍将兵及び居留日本人(総計120万余名)の抑留の実態については、帰還兵士等の手記や 日本側の僅かな資料によって知れるのみで、その実態が不明確 であった。今般、立正大学名誉教授増田弘氏が上梓された「南 方からの帰還」(慶應義塾大学出版会2019)で相当程度明らか になったと云える。本話で、小生の理解した範囲で、その要点 を紹介する。



- 1 連合国の日本南方軍地域占領の概要
  - 東南アジア諸国連合軍を構成した英、蘭、豪、米の4ヶ国軍が分割占領、武装 解除、抑留、日本への帰還等を分担した。最も、本連合軍はマ元帥の統制下に あった。
- (1) 英軍:ビルマ、マレー、シンガポール、タイ、ビルマ方面軍(木村中将)日本軍将 兵等約70万人
- (2) 蘭軍:インドネシア(蘭印) 第七方面軍(板垣大将)日本軍将兵等約23万人
- (3) 豪軍: 東部ニューギニア、豪北 第八方面軍(今村大将)将兵等約15万人
- (4)米軍:フィリピン、第十四方面軍(山下大将)将兵等約13万人
- 2 日本軍将兵は「捕虜(POW)」か「降伏者(JSP)」かを巡る米・英対立 マッカーサーは、ポツダム宣言9項は国際公約でもあり、早期帰還方針であったが、 東南アジア諸国連合軍のマウントバッテン(英)は、戦後復興に日本軍将兵等を活用した いとの思いもあり、賃金支払い義務のない単なる日本軍降伏者(JSP)として取り扱う意 向であった。POW は終戦以前に捉えた者であると定義づけた。

本国政府を巻き込んだ論争となったが、最終的にはマ元帥の方針通りとなった。尚、 蘭軍も英軍に追随した。一方、豪軍はその中間的対応と云える。

3 整斉たる日本軍の降伏と抑留生活

連合軍を上回る日本軍の勢力に戦々恐々の連合軍であったが、日本軍は、南方軍司令官以下各方面軍司令官の見事な統率により整斉と降伏し、武装解除に応じた。現地自活、自給自足に早期に取り組んだ。抑留生活も、概ね軍の建制を保持していたこともあって概して大きなトラブルもなかった。

4 強制労働に拘った英軍等

英軍は、米軍の大幅な配船もあって、日本人の復員を推進する予定だったが、引揚待機中の JSP の約 10 万名を労働者として強制的に残留させる方針へと転換した。東南アジアのコメ不足解消のために、JSP を使役せんとする腹積もりだった。現地軍からの要望もあり、船舶不足も影響した。彼等は雑役に使われ、賃金も支払われず、極めて過酷な労働環境であった。オランダも英軍に追随した。

悶着はあったが、最終的には英蘭政府も早期復員に踏み切り、賃金も支払うこととしたが、日本政府に押し付けた。何たることか。

5 日本人抑留者に対する現地国民の対応種々相

インドネシアでは日本人に対して、概して好意的であったが、フィリピンでは米軍の 宣伝工作やマニラ市街戦等の関係もあり、反発・反感が強かった。

- 6 復員に向けての吉田首相のマ元帥への嘆願が奏効
- 7 日本人戦犯(所謂 BC 級)への追及度に差異がある。
- 8 復員完了時期

英軍地域:1947(S22)年末、蘭軍地域:1947(S22)5月、豪軍:1946(S21)年6月比:1947(S22)年10月 \* シベリアからの復員に比べればましだが・・

### 第百七十六話 守備部隊の敢闘が北海道を守った!

あわよくば北海道を軍事占領せんと目論んでいたソ連軍の鋭鋒を食い止めた戦いがある。彼らの敢闘がなかったならば、北海道は敢え無く占領されていたかも知れない。第九十一師団と戦車十一連隊が守備していた占守島に、8月18日0200ソビエト軍が突如として上陸し、日本軍守備部隊と激しい戦いとなった「占守島の戦い」がそれである。

## 1 占守島の戦略的意義と日本軍守備部隊の概要

占守島は、北千島列島のカムチャッカ半島に一番近い島であり、同半島南端にあるソ連軍のペトロパブロフスク海軍基地からは10数キロしか離れていない。夏場には日魯漁業の缶詰工場があった。島中央に四嶺山が位置し、他は穏やかな丘陵地帯である。年中濃霧が発生している。隣の幌筵島との間には、水深が深く、大型船も航行可能な幌筵海峡がある。



この重要な海峡を守るために、満州から転進した第九十一師団(師団長堤不夾貴中将、2個旅団基幹)と戦車十一連隊が配置された。この内、占守島には、南部に4個大隊を集中配備し、北部には遊撃戦任務の1個大隊の計約8,400名が配備されていた。

玉音放送に引き続き、第五方面軍(在北海道樋口季一郎中将 第七話参照)から、「停戦、自衛戦闘は妨げず」との指示を受け、守備隊は武装解除の準備を進めていた。よもやソ連軍が侵攻する可能性はないものと判断していた。但し、警戒のため、沿岸拠点に一個中隊規模の部隊を展開させていた。

## 2 ソ連軍の状況、上陸戦闘

8月9日、日ソ中立条約を一方的に破棄して対日参戦したソ連は、8月15日千島列島 北部の占領に関する作戦の準備・実施を第二極東方面軍司令官及び太平洋艦隊司令官に 発した。ソ連軍先遣隊は、8月18日午前二時半頃、占守島の上陸適地である竹田浜に上 陸を開始した。沿岸配備された日本軍部隊が直ちに反撃したが、午前七時頃には、ソ連 軍第一梯団の上陸は完了した。第二梯団は日本軍の砲撃により手間取り、午前十時頃に 完了した。上陸部隊の火砲等は輸送船に残されたままだった。

日本軍は、方面軍の命令もあり猛烈な反撃を開始した。反撃部隊は、18 日午後にはソ連軍を殲滅できる有利な態勢となった。

昼頃、方面軍から戦闘停止、自衛戦闘移行の命令があり、16 時をもって戦闘停止した。 ソ連軍が、尚も戦闘を継続するに及び日本軍は後退した。余談ながら、占守島女子工員 20 名の脱出劇もあった由。

# 3 停戦交渉、停戦

大本営はマ元帥にスターリンへの停戦の働き掛けを依頼するも、スターリンは黙殺した。両軍間に停戦合意が成立、降伏文書に調印したのは、21 日 21 時である。23 日には武装解除された。日本軍の戦死者は、戦車連隊長等 600 名、対してソ連軍は 3000 名であった。スターリンの命令で、極東ソ連軍は、2 個狙撃師団をもって北海道上陸命令を下達し、部隊は船上待機していた。マ元帥が、8 月 30 日に米軍が北海道を占領すると宣言したのを受けて引き返した。

- 4 占守島の敢闘がソ連の侵攻を停滞させ、結果的に、北方領土を除き、北海道の占領を 阻止し得たと云っても良かろう。因みに北方領土の占領は8月28日から9月1日の間で ある。スターリンが「樋口(方面軍司令官)と堤の二人の将軍が居なかったら、我々ソ連 軍は北海道に侵攻して占領していたであろう。一旦占領してしまえば、米軍が何を言っ ても問題にならない。北海道を占領さえしていれば、後の日本列島は共産革命で赤化す ることは容易い。・・(以下略)」と語ったという。危うかった。
- \* 占守島守備部隊の勇戦敢闘に感謝だ。

### 第百七十七話 長蛇を逸したり!

帝国海軍の作戦・戦闘を見ていると、艦隊撃滅のみに終始し、"長蛇を逸し"たと思える事例が多々ある。(頼山陽作 「川中島」の結句 流星光低、長蛇を逸す)歯痒い限りである。その原因は、艦隊決戦原則に拘ったことにあった?

1 長蛇を逸した海軍作戦(勿論異論・擁護論は多々あるのだが・・)



(1) 真珠湾攻撃(1946(S16)年12月8日)

日本海軍の攻撃により、米太平洋艦隊の戦艦部隊はほぼ壊滅し(沈没4隻等)たが、攻撃部隊は何故か、給油艦や重油タンク(450万年)を攻撃することなく、帰投した。基地機能の再建や太平洋艦隊の運用に相当な支障を及ぼし得た筈だが・・。米本土上陸 迄は過望だとしても、千載一遇の機会を逸したのは残念だ。

(2) 第一次ソロモン海戦(1947 (S17) 年8月9日)

本海戦は日本海軍第八艦隊(三川海軍中将)の一方的な勝利であったが、残念ながら、 米輸送船団に対する攻撃は行わずに、ガダルカナルへの揚陸を許してしまった。同艦 隊の主任務は、輸送船団撃破の筈だったが・・。何故だ?

(3) 南太平洋海戦 (1942(S17)年 10月 26~27日)

米軍に占領されたガ島飛行場奪回を支援する日本海軍第二艦隊(近藤中将)、第三艦隊(南雲中将)と米空母機動部隊の海戦。日本軍の勝利で、空母二隻中の空母1隻を撃沈、空母エンタープライズは中破で、日本軍空母は健在だった。逃走するエンタープライズを結果的に取り逃がした。戦艦ではなかったので、徹底的な追撃をしなかった?この後日本海軍は上陸部隊の支援をしたのか?日本陸軍の上陸は失敗した。

(4) レイテ沖海戦 (1944(S19)年 10月 20~25 日)

レイテ島に米軍が上陸したのを受けて、上陸地点への突入を計画していた第一遊撃 部隊(栗田海軍中将)は、大輸送船団を目前にして何故か反転した。謎の反転!

- 2 艦隊決戦優先主義の弊害
- (1)南方からの海上輸送路の護衛

第一段南方資源地帯攻略後は、その戦略物資を日本に環送する必要があり、その為 に必要な船団護衛は本来の海軍の任務である筈だったのだが、通商破壊など論外・・ (第百十五話 お粗末なシーレーン防衛 参照)

(2) 米艦隊を誘き出して撃滅する筈だったミッドウェー作戦

第一段作戦終了後の作戦としてのミッドウェー攻略の必要性があったのか、妥当だったのか?MI 作戦は、全般作戦計画を無視しての米艦隊撃滅のみを追求する愚という他ない。結果的に、南雲機動部隊・第一航空艦隊の主力空母 4 隻が撃沈されるなど、海軍は惨敗を喫し、爾後日本軍は劣勢に追い込まれた。

(第三十二話 ミッドウェー惨敗 戦争指導構想の混迷 参照)

(3) 航空作戦の優位性無視

開戦劈頭のマレー沖海戦で、航空攻撃の優位性を日本が証明したにも拘らず、艦隊 決戦優先から脱却できなかった。戦艦中心主義であり、空母機動部隊構想への転換が 容易に出来なかった。(第十九話 大艦巨砲主義からの転換が出来なかった日本 参 昭)

(4) 島嶼群の不沈空母化(要塞化)の不備

占領した島嶼群を不沈空母化して来攻する米艦隊を邀撃する計画だった筈が、何故 か組織化もされず、前へ前へと敵を求めて出ていったと思えるのだが・・

(第百十六話 不沈空母は画餅に帰した 参照)

\* 艦隊決戦こそ海軍の戦闘との思い込みが長蛇を逸し、作戦に悪影響を及ぼした。

(第百七十七話 了)

## 第百七十八話 同床異夢の「絶対」も虚し!

日米英蘭戦は、南東方面の戦況圧迫、アッツ島の玉砕、欧州戦局では、北アフリカ戦線の終焉等があり、太平洋全域からインド洋に至る防衛態勢の強化が喫緊の課題となった。大本営は、一旦間合いを切って態勢整理を策すことを決定し、1943(S18)年9月「絶対国防圏」を設定した。然しながら、本構想には、内包する深刻な問題もあり、予期の成果を得ることなく水泡に帰した。本話ではそれらを管見する。

## 1 絶対国防圏設定に至る経緯

伸びすぎ・広がり過ぎた戦線の防衛は、国力の限界であり、絶対確保すべき後方要線に態勢整理すべきであるとの論が、1942(S17)年12月頃から、企画院、陸軍省関係者、大本営陸軍部等から出されていた。第八方面軍の意見も寄せられていた。海軍側にも戦線縮小を要するとの意見もあったが、大勢は現戦線からの後退に強力に反対していた。

海軍は、3月「第三段作戦計画」を発令し、連合艦隊は、邀撃帯構想を含む [Z作戦]の要領を指示した。然し、マーシャル諸島失陥に伴い、1944(S19)年2月マリアナ、カロリンを第一線邀撃帯として決戦する構想へと転換して、陸海の構想がマッチした。

8月中旬以降、陸海軍統帥部の合同研究等を経て、新作戦方針の御裁可を得て、9月25日、大本営政府・連絡会議で「今後採るべき戦争指導の大綱」を決定した。

## 2 絶対国防圏

「千島〜小笠原〜内南洋(中・西部)〜西部ニューギニア〜スンダ〜ビルマを含む圏域」、その「要領」に海軍の強い要望もあって、「随時敵の反攻勢力を捕捉破砕す」と挿入

### 3 絶対国防圏の瓦解

国防圏の前方要線のギルバート、マーシャルでは海軍の決戦は行われず、陸軍の派遣もないままに失陥した。更に、1944(S19)年中期には西部ニューギニアと内南洋方面に米軍の攻撃を受け、西部ニューギニアの戦況打開はできず、マリ



アナ諸島の島嶼は相次いで占領された。マリアナ諸島の失陥 (1944/7~8 月) は即ち絶対 国防圏の瓦解でもあった。

- 4 問題点は何か(紙幅の関係上項目のみ)
- (1) 陸・海軍の作戦思想の相違

後方要線の確保を重視する陸軍に対し、海軍はその要線は反撃の為の進発線との認識であった。即ち、トラック、マーシャル諸島、ラバウル及びソロモンを主陣地と捉えるか前進陣地と捉えるかの認識の差があった。陸軍は機動防御的構想で、海軍は現態勢維持・早期決戦をあくまでも追求していた。

- (2) 締結された中央協定に基づく連合艦隊への指示:マーシャル・ギルバート方面の前 方要域における行動準拠付与→陸軍の認識とは相違→作戦指導の混迷?同床異夢
- (3) 陸軍の太平洋正面への戦力転用 その規模・場所に関しては中央協定では明示無し 陸軍は充分な兵力を転用させたか?大陸打通作戦との並行実施等、真剣さ?に疑問
- (4) 作戦準備の遅延 転用予定部隊に派遣中止や遅延等により防備準備の遅延(築城不十分等)、一部では海軍が放棄する地域に陸軍部隊が派遣される等ちぐはぐな面も
- (5) 態勢が整わぬうちに航空部隊が損耗(ウエワク(1943/8)、トラック(1944/2)等) 予期以上に米軍の反攻が早かった。情報収集態勢は不十分?
- (6) 陸海軍の相互不信 陸軍は後退思想と海は言い、海軍は戦略が解っていないと陸は 非難。太平洋正面は海軍担当との暗黙の理解があって熱意・真剣味が足りぬ?
- (7) 戦略転換に多大の時間(半年近くの論、海軍と陸軍の考え一致)を要し空費した?
- (8) 全般戦争指導計画上の課題 各種ケースを想定していたのか?
- \* 戦局厳しき時ほど協同の実を挙げるべきなのだが、・・

## 第百七十九話 大勝利なるも戦略目的達成ならず、陸軍史上最大の作戦

帝国陸軍建軍来史上最大の作戦と言われるものが「大陸打通作戦」である。日本は、太平洋正面においては劣勢に追い込まれていたが、大陸正面では、日本陸軍は向かうところ敵なしの状況であった。この時期の大本営発表は大陸打通作戦に関するものが主であり、暗くなりがちな国民を鼓舞した。戦いは勝利の連続で、作戦目標を達するも、日本の退勢を挽回することは叶わなかった。



## 1 大陸打通作戦 (一号作戦) の概要

太平洋正面の戦況に応じて支那派遣軍から部隊を抽出転用しつ

つあり、また南方資源地帯とのシーレーンも米軍の攻撃により被害を受けつつあった。 更には、大陸に設定された連合国軍の航空基地からの日本本土爆撃も予期されつつあり、これらの状況を改善すべく一大作戦が計画された。本作戦は、1943 (S18) 年夏頃から検討されていたが、大兵力を要するので中々実施決定に至らなかった。台湾に対する空襲が行われるに及び建軍史上最大の陸上作戦が敢行された。

1944(S19)年4月17日~12月10日 作戦距離2400km (黄河~長江~仏印) 日本軍兵力:17個師団、1戦車師団(800台)、6個旅団の約50万人 中華民国軍 約100万人 日本側損害 11742名 戦病死多数十万とも

#### 2 作戦経過の概要

前半のコ号作戦/京漢作戦(河南の会戦/豫中会戦、洛陽攻略戦)と後半のト号作戦/湘桂作戦(第四次長沙会戦、衛陽の戦い、桂林・柳州の戦い、南部粤漢線打通作戦と湘桂反転作戦(光号作戦))に分けられるが、日本軍は敵師団を壊滅に追い込み、或いは敵師団長を戦死させ、快調に進撃を続けた。中国軍は後退・撤退した。一部においては苦戦したものの、作戦は順調に進展し、12月10日には仏領インドシナに到達した。

航空戦は日本陸軍航空機の太平洋正面転用による減少と連合軍の増加により次第に攻 守所を変えつつあった?

## 3 評価

- (1)米陸軍航空基地群の占領は出来たが、内陸に航空基地を移動設定し、或いは、マリアナ陥落(1944(S19)年7月)もあり、日本本土空襲防止の狙いは果たせなかった。
- (2) 南方との陸上交通路の打通は為ったが、点と線のみであり、それを維持することは 困難であった。
- (3) 戦略目的の設定の適否及び本作戦の要否

支那事変の早期解決のためには蒋介石政権の覆滅が肝要(戦後史を知る者からは共産党軍の撃滅を最優先すべきだったのではとの思いも強い。)であり、まずそれを優先すべきではとの異論も出されたのであるが、首肯しうる。更には、太平洋南東方面の戦況切迫に際してこれほどの大作戦を実施する必要性が本当にあったのか?陸軍は、太平洋正面は海軍担当であり、吾知らずを決め込み、冷淡だった?

## (4) 中国軍に対する評価

連合国の首脳や軍指導者は中国軍に対して非常に厳しい見方をしているが、当然だろう。蒋介石軍の士気の阻喪、腐敗は酷く、連合国軍と共に戦う意欲も能力もないと断じている。日本陸軍が強すぎたという面もあったのだろうが、それにしても酷い言い方だ。事実、ヤルタ会談・ポツダム会談に、蒋介石は招かれなかった。

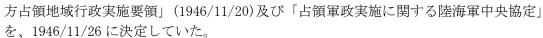
- (5) 日本軍は「焼くな、殺すな、犯すな」の三悪追放を発し、軍律を遵守させた。
- (6)戦争には敗けたが、中国軍に降伏することを肯じずの陸軍将兵の痛切な想いは理解 できる。
- \* 戦いに勝っても戦略目的達成に寄与せずんば、功なし!

#### 第百八十話 日本軍政の特色

日米英蘭戦開始直後に、占領地域で軍政を施行した日本軍の「軍政」の実態がどうだったのか、所謂欧米列強並みの植民地政策だったのか、或いは戦争目的に鑑み欧米とは異なる政策が行われたのか等を知ることは、我が国と東南アジア諸国との関係を考える上で示唆を与えてくれる。(加藤裕著「大東亜戦争とインドネシア」を参考に)

1 南方占領地域、インドネシアの軍政概要

日本は、香港、比、緬(ビルマ)、英領馬来、蘭印で軍政を敷いた。日本にとって初のことでもあり、日米英蘭戦に先立ち、「南



蘭印については、欧州よりも広大な島嶼地域を3つに区分して軍政を行った。即ち、 蘭印の中心地ジャワ島は第16軍(今村大将)、スマトラは第25軍(山下大将)、ボルネオ 含む東側は海軍が担当した。

占領地の治安回復、重要国防資源の急速獲得及び作戦軍の自活確保に資すことが狙いであった。原地住民に対しては皇軍に対する信倚観念の助長、独立運動は過早誘発を回避、等が要点である。各地域の実情に沿った形で具体的な要綱を策定して実施した。

#### 2 特色等

- (1)住民は友好的・協力的であった。事前の宣撫工作の効果、住民が信じる予言を活用、 日露戦争で西欧諸国に勝利した国に対する尊敬や関心、戦前各地で活動した日本人に 対する親しみがその背景にある。
- (2) 日本軍の軍律の厳しさに対する信頼
- (3) 特に今村は軍中央から軟弱、寛大すぎるとの批判
- (4) 民族指導者の協力獲得 スカルノ、ハッタ等
- (5) 早期独立を期待する民族運動に対する政治参与への道~1945 (S20) 9月7日独立容認へ
- (6) 兵補(原地住民の補充兵)と郷土防衛軍(PETA)の育成 兵補の競争率は高かった。PETA は終戦時 69 個大隊、3.8 万人に
- (7) 労務者の供出制度 南方各地での大量の労働力の必要性に対応して、機関を設置して募集・送出した。住民の自発協力を期待したものであったが、一部では強制的ロウムシャが戦争末期には重労働故に死傷者続出(泰緬鉄道等)、総数は22万人?
- (8) インフラ整備(根山トンネル等)、農業技術者派遣による農業指導、住民への医療奉仕等
- (9)総括 3年余りの軍政の間、欧米の植民地政策とは一味も二味も違う軍政を敷き、 住民も協力的ではあった。日本的なものの強要もあり、早期独立の夢も消え、戦局の 悪化に伴い日常生活も圧迫され、対日感情は変化しつつあった。

<アンポンタン>の話 日本軍歩哨にお辞儀を忘れた村民に対し浴びせられた怒声に対し、「アンポンタン」と村民は謝った。旦那ごめんなさいの現地語だが、歩哨は馬鹿にされたと思い込み、更に厳しい怒声を発したと云う。 (閑話休題)

3 反日暴動と住民虐殺問題

大掛かりな反日蜂起計画は事前阻止され、散発的な暴動は各地で起きた。 カリマンタンでは、インドネシアの公式記録では2万人が虐殺とされているが、日蘭側 の推計等では千数百人程度であり、一桁違っている。スマトラでは防空壕で労務者三千 人が虐殺とされ、東チィモールでは4万人が虐殺等は噂を史実と認定した?

- 4 BC級和蘭軍事法廷 一番死刑が多かった。復讐裁判そのものだ。
- 5 蘭印での戦没者7万~12万人と推定、各地に46基の慰霊碑が建立、その現状は?
- \* 異なる戦争目的達成に寄与する軍政の難しさ痛感。復員等に関しては、百七十四話参照。

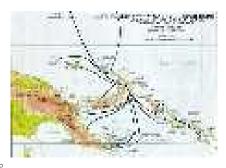
(第百八十話 了)

### 第百八十一話 死んでも帰れぬニューギニア

「ジャワの極楽、ビルマの地獄、死んでも帰れぬニューギニア」と帰還兵達に評されたニューギニア戦線だが、大東亜戦争の中でも取り上げられることが意外に少ない。作戦期間の長さ、戦没者の多さ、その過酷な戦いや生活状況等々多くの論点があるにも拘らず、意外に知られていない。多分に、大東亜戦争は日米戦であり、太平洋の戦いであるとの理解が原因で、その比重が低いのだろう。

## 1 ニューギニア作戦の概要

日米英蘭戦開始間もない1942(S17)年1月29日、 陸海軍中央協定が締結された。日本の作戦目的は、「英 領ニューギニア・ソロモン群島と豪州の連絡遮断、豪 東北方海域の制圧」であり、ニューギニアについては 「ラエ、サラモア攻略後なしうればポートモレスビー を攻略する」とした。この決定により1942年3月8 日、第四艦隊(井上成美海軍中将)と陸軍南海支隊は、 東部ニューギニアのラエ、サラモアに上陸し占領した。



これがニューギニアの戦いの始まりであり、ポートモレスビー攻略(MO)戦、ラエ、サラモア、フィッシュハーへンの戦いを経てマダンからの後退作戦、そしてアイタペ戦とマッカーサー率いる米豪連合軍との間で、1945年8月15日の終戦まで戦いが続けられた。連合軍の優勢な戦力の前に日本軍は次第に制海権・制空権を失って補給が途絶し、将兵は飢餓や過酷な自然環境とも戦わねばならなかった。

ニューギニアに上陸した 20 万名の日本軍将兵のうち、生還者は 2 万名に過ぎなかった。 本作戦には、高砂義勇兵、朝鮮志願兵、インド兵も本戦闘に参加している。

### 2 初期作戦後の戦争指導構想の破綻?

初期進攻作戦の目的は、南方資源地帯の確保であり、戦略守勢に転じるべきと主張する陸軍と、飽くまでも積極作戦を追求して更に前方要域に進出して態勢を採るべしと主張する海軍の考えの整合性を徹底的に図ることなく行われたニューギニア作戦、米豪遮断(MO及びFS作戦)作戦だった。

- 3 ニューギニア戦場の過酷さ 悪疫瘴癘の蛮地、現地調達困難、食糧尽き自活へ、動物・ 昆虫食、兵要地誌すらなし、探検記を参考にした。
- 4 ガ島奪回作戦とポートモレスビー攻略戦の二正面を強いられての苦戦 "海軍が陸軍に通報することなく"と云われるガ島への飛行場設営と米軍の上陸への 対応作戦との二正面作戦を強いられ、苦戦が倍増した。海軍に振り回された感がある。
- 5 辻参謀の横暴:ポートモレスビー攻略の南海支隊に軍司令官から命じられていた作戦 のための事前偵察を中止させ、即時攻略命令を出した。無謀且つ理解不能
- 6 集団投降事案(竹永事件):1945(S20)年5月3日、連隊主力からはぐれた竹永中佐以下50名が日本軍としては珍しい集団投降をした。
- 7 航空戦の帰趨:当初拮抗していた航空戦力が、連合軍優位になり、戦域における制空権は米豪軍に帰した。ニューギニア沖海戦では日本優位であったが、1942(S17)年5月の珊瑚海海戦で空母と艦載機多数を喪失し、MO作戦は中止せざるを得なかった。制海・制空権なき陸軍作戦は、増援無く補給なく、非常に厳しいものとなった。
- 8 豪の積極的参戦を防止し得ず

豪の防衛ラインは、ニューギニア及びソロモンである。そして、ラバウルは、豪州防衛の警戒陣地ともみるべき要衝とも指摘される。斯様な全般態勢下で、海軍が指向した第二段作戦は、豪州をして、宗主国である英国に義理立てしての戦い(?)から祖国防衛戦争へと一気に転回させるのである。政戦略の不適と云うべきか。

- 9 優先的復員:過酷な戦場だったが故に優先的に復員が為された。
- \* 攻勢終末点を越えての作戦は矢張り無理だ。陸海軍の意思疎通・連携が良くても無理? (第百八十一話 了)

第百八十二話 戦略調整なき同盟は同盟にあらず!

日独伊三国(軍事)同盟 (1940(S15)年9月27日調印) は、日本の作戦に如何なる影響を与えたのか?真の軍事同盟だったのか?

### 1 三国同盟の概要

三国同盟は、欧州戦及び日支事変に参戦していない国からの攻撃に対する相互軍事協力を約したものである。日本にとっては米国を牽制し、支那事変を有利に解決する狙いがあった。同じく、独にも米国が英国側で参戦すれば欧州正面と太平洋正面での二正面作戦を強いることとなり、米国の参戦防止が期待できるとの思惑があった。締結には積極、消極両派の鬩ぎあいがあったが、結



局は、"バスに乗り遅れるな"の大合唱に押されてしまった。第3条の自動参戦条項は 事実上空文化することで決着はしたが・・。何れにしても、同盟締結は、米国の対日警 戒感をより高めたのは事実である。

尚、1942(S17)年1月18日日独伊軍事協定が締結、作戦区域の区分を東経70度線として相互協力することとされた。

- 2 軍事的連携(共同作戦)について
- (1) 初期進攻作戦での香港攻略、マレー・シンガポールの攻略は独にも益した。
- (2) 1941(S16)年6月22日独は、ソ連に奇襲攻撃を開始した。独は日本のソ連連携攻撃を期待していた。松岡外相や陸軍の一部ではこの機に一気に北方問題を解決すべきとの論もあったが、最終的には「熟柿北方論」に落ち着いた。
- (3) 初期進攻作戦後の対独連携

陸軍、海軍軍令部、連合艦隊の密接な戦略調整なきままに、混迷要因を孕んだ「今後採るべき戦争指導の大綱」が 1942/3/7 決定された。

陸軍は、爾後の作戦として、英国への打撃、重慶政府への打撃から、セイロン占領が有効だろうと判断していた。ここに、インパール作戦の萌芽がみられる。陸軍は、印~西亜打通を行って、アフリカでの日独提携を企図していたのだろう。然しながら、この壮図も、大戦の転回点の一つとも云われるエル・アライメンの戦い(1942/7~11)でロンメルが敗れたことにより、夢と潰えた。

(4) その後、英国とアジアの連絡遮断のためにインド洋作戦が行われた。

セイロン沖作戦(通商破壊作戦を要請されて、1942/4月5~9日、英空母等を撃沈)、マダガスカルの戦い(マダガスカルに逃走した英海軍艦艇攻撃1942/5/31 第三十話関連)、その他、日本海軍潜水艦による通商破壊作戦(遣独潜水艦作戦)と日独の協力による通商破壊作戦等を行った。日伊連絡飛行も行われた。独は、日本にインド洋派遣の強い要請を行ったが、日本には熱意がなく、日独間に不協和音が生じ始めた。

\*こうしてみると、三国同盟は軍事同盟というより政治宣言に近いもののような気がするの だが、どうだろう。

- 3 日独連携の評価
- (1) 軍事同盟ならではの密接な戦略調整が為されていなかったのは、問題だ。日本が独の実情を知らず、独は対ソ重点で日本の対ソ参戦を臨み、日本はまず英屈服を狙って中近東での日独連携を望んでいた。
- (2) 日独が連携しようにも地理的に余りにも懸隔しており、実質的な軍事的連携は期し難かったと考える。
- (3) 米国に、欧州と太平洋という二正面作戦を強いたという点では効果があった。
- (4) 本同盟の狙いが米国参戦の牽制・抑止・防止であるならば、日米英蘭戦開始で同盟 無用になったとも云える。
- \*連合(共同)作戦と云うには余りにもお粗末な日独連携だ。

第百八十三話 未完の国家プロジェクト:戦争調査会

終戦間もない 1945 (S20) 年 10 月 30 日の閣議決定に基づいて、日本独自に「戦争の原因と実相」を調査する「戦争調査会」が発足した。我が国独自に戦争について調査したことはもっと知られて良いし、評価されるべきだろう。然しながら、表題の通り、本調査会は、所期の目的を達することなく、解散せざるを得なかった。

## 1 戦争調査会の概要

戦後初の総理である東久邇宮氏の後任は、70歳を超える幣原喜重郎氏である。幣原は政府による敗戦原因の調査とその結果公表を心中期しており、10月30日に「敗戦の原因及実相調査の件」を閣議決定した。当初の名称は、「大東亜戦争調査会」であったが、翌年1月に「戦争調査会」と改称された。政治・外交(斎藤隆夫衆議院議員)、軍事(飯村穣陸軍中将)、財政・経済(山室宗文元三菱信託会長)、思想・文化(馬場恒吾読売新聞社長)及び科学技術(八木秀次大阪帝大総長)の5部会(調査室)と事務局(二課)で構成さ



れ、総裁には幣原が就き、長官には青木得三 (庶民金庫理事長) が任命された。委員を 含め、何れも戦時体制に「手が汚れていない」人物が選ばれている。

東京裁判とも符節を合せるかのように調査が行われ、対日理事会ではソ連をはじめとする諸国が戦争調査会に疑念を抱き、列国との協調を重視する米国の意向を汲んだ吉田首相により、1946(S21)年9月に廃止された。委員等名簿はWikipediaに詳しい。

一年弱の期間に総会、部会長会議等 41 回の会議と所要の調査活動を精力的に行った。 第二部会は、軍関係者が委員で、東京裁判の関係もあり一回も開催されなかった。調査 報告書は纏められなかったが、調査会の資料は、公刊資料全 15 巻として、参照できる。

### 2 調査会の意義は

日本が独自に戦争について調査したことは、意義あることであった。唯、敗戦直後の特異な状況下で、冷静かつ客観的な調査が可能かどうかについては若干の疑義がある。また、日本側の調査は、戦争指導者は戦犯容疑に問われても居り、終戦直後に重要書類は遺棄・焼却もされ、更には、連合国側の調査には高い壁があったと云える。 "それが限界"と言ったら酷か?冷静かつ客観的な調査には相応の時間経過を要するのだろう。戦後75年が経過した、"今こそ"が、その時ではなかろうか?

3 調査会の公正性・中立性の担保は?

欧米協調派、自由主義者、講座派等の類似した歴史観の人物選定、敗けた側が敗けた側を裁くことへ異論等があり、国内社会の無理解、誤解、消極的反応、批判があった。

- 4 幣原には事後法による戦争責任裁判の意思はなかった。問題は、調査会の設立目的が 奈辺にあるか、戦争原因の客観的解明なのか、戦争責任者の裁判に直結するのか、将来 敗けない為の調査・分析なのか、将来の平和国家建設に資するものなのか等々種々議論 が行われた。更に、折から東京裁判も始まろうとしており、公職追放問題もあり、調査 は微妙な問題を内蔵していた。それらを忖度しながらの調査会の活動であったと云える。
- 5 調査項目一覧は、井上寿一著「戦争調査会」66p 参照
- 6 幾つかの重要な論点がある。以下"幻の政府文書を読み解く"との副題のある同書の中で、小生の気になった点を列記する。a 戦争回避の可能性 b 戦争の起点 c 日米和平の可能性、 d 軍部の政治介入と二大政党制の限界 e 満州事変の不拡大の可能性 f リットン調査報告書の認識 g ブロック経済と日本経済 h 支那事変解決の可能性 i 二元外交で複雑化(松岡外相、近衛首相、N工作等) j ソ連に対する過大な期待 k 三国同盟への期待 l 和平チャンスを逸すること多し m 戦争終結方策 n 軍部の政治支配は限定的 等々興味ある事項がある。
- \* 客観的・公正・中立なる我が国独自の戦争調査により、「正史」を確定すべきだろう。 (第百八十三話 了)

### 第百八十四話 敵将の日本軍評!

大東亜戦争で日本軍と最も長く戦い、そして戦後に日本に計り 知れない影響を及ぼした敵将は、言う迄もなくマッカーサー大将 である。日本とは因縁浅からぬ敵将である。

彼が、日本軍との熾烈な戦いを通じて感得した日本軍評は辛辣 である。耳を傾けることも必要であろう。

- 1 マッカーサーの日本軍との戦歴
- (1) 比島 1941/12/8 ~1942/5 下旬 マッカーサーは、大統領 の命令により、比コレヒドールからケソン大統領共々豪へ脱出 (3/11) した。"I shall return"彼は豪州では大歓迎された。 脱出は彼の人生にとって最大の汚点だ



(2) 1942/4/18 南西太平洋方面最高司令官に任命

太平洋戦域を担当する米国は海軍に統一指揮を任せる積りであったが、マッカーサーの人気、強烈な個性、最先任でもあって、戦域を二分せざるを得なかった。マッカーサーにはニューギニアからフィリピンへのルートを、一方ミニッツ太平洋艦隊司令長官には、ソロモン諸島からマーシャル、マリアナ諸島、硫黄島のルートが予定された。マッカーサーは豪州にあって、日本進攻を準備する。

- (注) ミッドウェー海戦 (1942/6/5) 後、先ずミニッツ隷下部隊がソロモン諸島域で反攻 を開始し、8月7日その隷下第一海兵師団がガダルカナル島に上陸する。ソロモン海戦や ガ島の死闘が続く。
- (3) マッカーサーは、ニューギニア防衛作戦を指揮しつつ、戦力増強を受けて 1943 年9 月反攻作戦を開始した。翌 1944 年 8 月にニューギニアでの勝利を確実にしたマッカーサーに、やっと比への道が開けた。安達中将の 18 軍は 9 カ月米軍を足止めした。マ大将にとっては想定外であり、米国の戦略にも多大な影響を与えた。
- (4) マッカーサー率いる米軍は、1944 (S19) 年 10 月 20 日レイテ島に上陸し、1945 (S20) 年 3 月にはマニラを占領した。執念の比帰還であり、マッカーサーは無念を晴らした。
- (5) 1945/5/25 米統合参謀本部は、マッカーサーにオリンピック作戦(九州進攻作戦) 命令を発した。(ミニッツは硫黄島戦〜沖縄戦)
- (6) 1945/8/14 トルーマンは、マッカーサーを連合国軍最高司令官に任命
- (7) 朝鮮戦争最中の1951 (S26) 年4月11日、マッカーサーはトルーマンにより解任された。
- 2 マッカーサーの日本観

日米戦開戦劈頭の日本軍航空機の活躍を見て、人種差別的発想から日本人を見下していたマッカーサーは、「戦闘機を操縦しているのは、(日本と同盟国の)ドイツ人だと信じ、その旨を報告したとされる。また、解任帰国後の、議会証言での日本人 12 歳論もある。本稿の趣旨ではないので、これらには深入りしない。

3 「マッカーサー大戦回顧録」(中公文庫)に見る日本軍評 (上巻 244p)

『日本軍の地上部隊は、いまなお、恐るべき頑強さで戦っている。日本軍の兵員の素質は依然として最高水準にある。しかし、日本軍の将校は上級ほど素質が落ちる。日本の将校団は、基本的に階級主義と封建的な制度で成立っており、厳密な職業的能力によって選ばれていない。ここに日本の弱点がある。日本の息子たちは心身ともにたくましいが、指導者に欠けている。』耳の痛い話である。

確かに、陸海軍の指揮を統一し、陸、海、空の立体作戦を考案遂行し、制空権を確保しての蛙飛び作戦で日本軍を翻弄し、無能とみれば作戦中でも指揮官を交代させる 等の厳しい実績主義(日本は温情主義?)等の米軍は、正に戦う組織であった。

\* 全面的にマッカーサーの評に同意する訳ではないが、・・・・

第百八十五話 数多の和平交渉不成就の原因は?

日本は、支那事変の早期解決、対米戦回避を希求しつつも、対支、対米和平の切っ掛けを掴めず、ずるずると戦線を拡大し、戦端を開いてしまったような気がする。数多行われた対支、対米和平交渉から我々は何を学ぶべきだろうか?日本人は交渉下手と片付けるだけでよいか?

- 1 対支、対米和平交渉の数々 当メモランダムで何回か取り上げているので、詳細は割愛させて頂く。
- (1) 对支和平交涉(第二十五話参照、五十九話、九十三話)
  - ・船津和平交渉 ・トラウトマン工作 ・ 汪精衛を通ずる和平構想
  - ・孔祥煕ルート ・スチュアート・王克敏ルート ・米国を通じての和平提案
  - ・南京政府との交渉 ・桐工作 等々
- (2) 日米交渉(第五十話、五十九話、等)
  - ・日米諒解案(N工作)・日米首脳会談・東条内閣の対米交渉「甲」「乙」案
  - 暫定協定案

(N工作:野村駐米大使、井川忠雄、岩畔豪雄対ハル国務長官等)

- 2 戦いつつの和平交渉(対支)と戦い回避のための和平交渉(対米)という特色がある。
- 3 これらの和平交渉経緯をどう見るべきか?
- (1) 相手側が応じる気があるのかどうかが根本問題 蒋介石は勿論ルーズベルトも日本との和平を本当に望んでいたのだろうか?暗号を 解読されて手の内を詠まれては、和平交渉が失敗するは必定だろう。
- (2)戦い継続中の和平交渉では、否応なしに和平条件を飲まなければならない状況下での交渉か、ある程度相手も飲める条件を提示しての交渉でなくては纏まらない。 和平条件の吊り上げや"対手にせず"等の不用意な発言で全てを無にする。
- (3) 日本側の和平に関する堅確な意思決定はどうだったのか?何処まで、真剣に和平を望んでいたのか?諸々の和平交渉があるも、それは明確な国家意思となっていた?
- (4) 一貫性ある交渉が出来たのであろうか? 二元外交的な和平交渉は勿論不可である。現地レベルの外交交渉者、外相レベルそして総理(政府)の一貫性が欠如していた面もあったようだ・・交渉人の選定は?
- (5) 和平交渉では、思い切った決断が必要

日米交渉では支那からの撤兵が最大の争点だったが、矢張り、撤兵は無理だったのだろうか?陸軍としては諸般の事情から飲めないとしても、政治決断は出来なかった? 対支交渉でも、満州のみの駐兵条件案も無理だったのか?

日露戦争の講和条約では、反発した国民が日比谷焼き討ち事件を起こしたが、それ位の思い切った和平決断が出来なかったのは残念だ。

- (6) 対支和平で感じるのは、国民党、共産党、日本の三つ巴の中で如何なる和平こそが 望ましいかの展望はなかったのかということだ。国共合作をさせずに、国民党を支援 した方が良かったのではないか?最も、戦後の後知恵ではあるが・・
- (7)様々な和平交渉のある段階ではそれが纏まるかもしれないというようなタイミングがあるように思える。その機を鋭敏に掴めるかどうかも重要だと思えるのだが。 その機は一瞬来りて、一瞬にして去ると思う。
- (8) 足元見られずにギリギリの交渉を行える、双方から信頼される人材を渇望
- (9) 下交渉から政府間交渉への格上げ等のタイミングは?
- (10)対支、対米の二正面回避の大戦略の決断なきが最大の禍根
- \* 大局判断の出来るリーダーの存在が不可欠なのだろう。日本は交渉下手?

## 第百八十六話 日米暗号戦、完敗!

ある本の中に、米軍による日本暗号の解読率が示されていた。 本メモランダム第四十三話「情報戦で負けた日本」6項で書いた 事項、所謂陸軍暗号安泰論を補強するものであり、然もありなん と感じた。それに対して異論や新事実が示されている。それについて述べる。

## 1 米軍の日本暗号解読率

「大東亜戦争「敗因」の検証」の66 p には、「昭和軍事秘話(中)」 (同台懇話会編)に、日本暗号の解読状況が以下の通りであると記



述されていると云う。「外務省:誤字のないものはほとんど全部、全体の約95%が解読された。

海軍:約70%が傍受され、その約70%が解読された。 陸軍:戦争前半 0%、19年 0.08%、19年末以降 0.6%(含終戦後暗号をとられて解読されたもの) 」であるという。これが通説としての陸軍暗号安泰論である。

## 2 陸軍暗号安泰説の根拠と反論

陸軍暗号安泰説の根拠は2点である。終戦後米軍関係者が"陸軍の暗号は解読できなかった"と述べたということと、陸軍の暗号は無限乱数方式であり原理的に解読されないというものである。確かに連隊暗号は無限乱数方式であり、上級部隊レベルでも重要文は無限乱数を使用したという。他にも非常事対策手段、人材の確保・教育の徹底、適宜な切り替えの実施等が行われて万全だったと安泰説者は述べる。

1970年代後半から公開された米軍機密資料に陸軍暗号の解読電文が含まれていたことから疑義が呈されるようになった。

解読できなかったと述べた米軍関係者名の証明の曖昧さや暗号関係者が機密情報を簡単に吐露する事への否定的意見も呈された。

陸軍の暗号担当者であった釜賀氏と、海兵出身の岩島氏の間で長らく論争が行われたが、決着がついたとは言えない。

- 3 仮に一部であったとしても解読されたのであれば万全ではなかったとは云える。だとしても、陸軍暗号は外務省や海軍の暗号に比較して相当堅固なものであったことは事実だろう。が、解読不能な無限乱数方式暗号が何故、解読されたのか?無限乱数を使用していなかったのではとの疑念もある。
- 4 解読されたことも知らずに使い続けた愚は繰り返すべきではないし、解読の恐れがあると大島駐独大使の危惧報告を無視した体質にも問題がある。米軍は独の情報を大島大使の電報解読によって得ていたとも云われるほどであり、防諜に無関心な日本の体質は問題だ。

マジック情報、パープル情報と米国は名付けて諜報に相当な努力を傾注しているが、日本との体質の差は何だろうか? 無関心とは云わぬが、どうも感性が鈍い。農耕民族故と片付けて良いものではない。

5 本話で感じることは、如何な万全なシステムであろうとも、人為的なミスは避けられ ないものであり、その対策を万全にしなければならないということだ。現在は万全か?

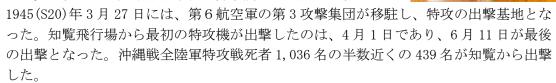
#### 第百八十七話 生きていた特攻

タイトルに魅かれて福島昴著「二度戦死した特攻兵安部正也 少尉」(学芸みらい社)を読んだ。普通の大学生が飛行将校となり、知覧から沖縄に特攻を敢行するも不時着そして帰還、その 後に再出撃して散華された安部少尉の壮絶なドラマである。

#### 1 沖縄航空特攻(陸軍)の概要

1945 (S20) 年 3 月の米軍の沖縄慶良間列島上陸から 6 月 23 日の沖縄の組織的戦闘終了までの 3 ヶ月間に、約三千名の二十歳前後の特攻隊員が、陸軍は、鹿児島の知覧や万世を含む九州各地から「振武隊」として、特攻を敢行した。

知覧は、大刀洗陸軍飛行学校の分教所として発足し、



知覧からの特攻機は、なでしこ隊の女学生等の見送りを受け、目印の開聞岳、次いで 鹿児島県三島村の黒島を通過として沖縄に直行したのである。

### 2 新聞報道「生きていた特攻」

本話の主人公安部正也少尉は、福岡県糟屋郡で大正 13 年 3 月生まれ、明治大学卒業後の昭和 18 年 10 月陸軍「特別操縦見習士官(第一期)」として大刀洗陸軍飛行学校に入隊した。爾来猛訓練を続け、翌年 12 月特攻兵に任命、昭和 20 年 2 月「第二十四振武隊」が編成(9 名)、同隊員に指定される。

同年4月29日(日)未明、知覧を出撃特攻攻撃、黒島に不時着した。戦死公報上はこの日に戦死したとされている。実際は、黒島で舟と漕ぎ手を確保して、舟にて5月2日夕刻開聞岳岬に到着、3日基地に帰還した。

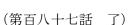
5月5日(土)早朝、第二回目の特攻に出撃、この際黒島上空で薬、現金、菓子等を島内の集落に投下した。その後沖縄にて特攻戦死(二回目の戦死)した。

1977(S55)年8月14日付の読売新聞の終戦特集で、「生きていた特攻」とのタイトルで大きく報じられた。また、2005(H17)年8月15日には、フジテレビが終戦特別番組「黒島を忘れない」としてテレビで放映紹介した。(以上「二度戦死した安部正也少尉」福島 昴著学芸未来社から関係事項を抜粋)

#### 3 安部少尉の「修養録」

福島昴氏のもとに届けられた安部少尉の遺品の中に「修養録」が含まれており、著者は、同書において修養録の一部を紹介している。安部少尉の修養録は、1943(S18)年12月11日から、翌年12月5日までの約一年間にわたり、飛行少尉の思いの丈を綴ったものである。43頁の文書である。(2)(3)は修養録記載

- (1) 大学新卒の青年が、国家危急存亡の危機に如何に立ち向かうかの決意を赤裸々に吐露している。
- (2)「自分らは何故此の教育隊に来たのか。死ぬるためなり。死して後生きんが為なり。 悠久の大義に生きんが為なり。死せんが為の道を学ばん。努力せん。死の為に。(以下略)」
- (3) 神国の天壌無窮を信ず。必勝を信ず。後に続く者を信ず。父母の恩、友の恩、感謝。
- \* 十死零生の任務に敢然と応募し、国家に殉じるその心意気に感動を覚える。彼が、 "死は生に通ずる"との哲学的境地に達し得たのは驚きだ。特攻出撃前の写真のあの 顔の神々しさにも驚きを禁じ得ない。同少尉が至純なる国家防衛の想いをもって従容 と特攻に赴いたことに、唯々頭が下がる。翻って我が国の現状はどうだろうか?国家 の安全・安心に無関心な者が多すぎないか?

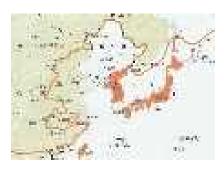


#### 第百八十八話 戦略の大転換出来ず、泥沼に!

支那事変は、解決したいと皆が願いながら、もがけばもがくほど泥沼に引きずり込まれてしまったような戦いであった。何とも悲しくなる。意図せざる拡大の要因は何だったのだろうか?それを知ることは己を知ることでもあるのではないだろうか。

## 1 支那作戦等推移概観

盧溝橋事件 (1937/7/7) 事件の不拡大方針が破綻し、 内地三個師団の動員下令で天津軍が攻撃開始して、北 支に戦火が拡大した。船津和平工作も挫折した。上海 居留民保護のため、第二次上海事変 (1938/8/13) が 起き、戦火は中支に拡大した。期待をかけたトラウト マン工作も、頓挫した。大本営は、南京攻略を発令 (12/1) し、12/13 日首都南京が陥落した。8 月 15 日 以降には、渡洋爆撃を開始している。



翌年は、徐州作戦 (4/7~6/7) を、次いで武漢(漢口)作戦 (1938/8/21~10/27) で武 漢三鎮(武昌、漢口、漢陽) 陥落、更には広東作戦 (10/12~11月) を行った。

1939 (S14) 年には、新首都重慶に対する爆撃の他、南昌等を攻略し占拠地域を拡大した。1940年には宜昌作戦(5~6月)を、1941年には、第一次・第二次長沙作戦を行い、1943 (S18)年には湖北省で江北殲滅作戦(2~3月)、江南殲滅作戦(4~6月)、常徳殲滅作戦(11~12月)を行った。

1944(S19)年には大陸打通作戦( $4/17\sim12/10$ )を、1945(S20)年 3,4月にも湖南省湖北省で二つの作戦を行った。

### 2 支那事変の長期化は?

日米戦も予期される状況で日本としては何とか支那事変を解決したかったのであるが、 相手の戦意を見誤り、現状打開を図る積りが逆に泥沼に引き込まれていった。思いとは 裏腹に戦線が拡大してしまった。

- (1) 蒋介石政権及び国民の継戦意思の判断見誤り
- (2) 陸軍の作戦による国民政府軍の殲滅・撃破・屈服が出来ず、逃げられ遂に捕捉し得ず。作戦失敗をカバーせんとして次の作戦を計画?
- (3) 「対支一撃論」は、奏効せず、結局成功しなかった。中央の不拡大方針を現地部隊は受け入れず、厳正なる軍紀の維持は?結果が良ければ良しとする風潮が蔓延?
- (4) 陸軍省部首脳陣の意見対立もあり、一貫した作戦指導欠如
- (5) 軍事作戦に目的を付与すべき政略の腰が据わっていなかった。「支那事変処理根本 方針」(S13/1/11)や「日支新関係調整方針」(S13/11/30)などの御前会議決定はあ るものの、独善的・総花的で、情勢の厳しさが反映されていない。軍事が政治をリー ド・引き摺り廻したと辛口の評もある。
- (6) 近衛首相の二度にわたる声明が蒋介石政権や欧米を刺激 第一次近衛声明(1938/1/16):「国民政府を対手とせず」 第二次近衛声明(193811/3):「東亜新秩序」提唱、汪精衛との連携模索
- (7) 北支のみならず中支にまで戦線拡大しても収拾が出来ないのであれば、思い切った 戦略転換が必要だった筈だが、挑発に乗せられ、現状打開策に終始した。
- (8) 北方ソ連の脅威を意識しての支那戦線であり、十分な戦力展開をしたのか?
- (9) 和平の好機有るも、和平条件の吊り上げなど以ての外だ。
- (10) 傀儡政権樹立の功罪は?汪政権との間で「日華基本条約」重慶蒋政権と併存総じて、極論すれば、政治のリーダーシップなく、陸軍統帥の厳正さなく、冷静な大局観なく、現状打開に堕し、抜けるに抜けられなくなったと云えるのだろう。 我が国欽定憲法下における政軍関係の最大の課題を遂に解決し得なかった。
- \* 戦略の大転換は凡人には為し得ないのだろうか?支那を解決せずして日米戦とは!! (第百八十八話 了)

## 第百八十九話 危険を顧みず、敵兵を救助!

第百六十九話で「戦場の武士道精神」と題して、ラバウル攻略作戦における日豪軍のエピソードを紹介したが、「大東亜戦争における日本軍の武士道精神」と題する記事を発見した。(<a href="http://www.goyuren.jp/kokumin-no-rekisi/column-69.pdf">http://www.goyuren.jp/kokumin-no-rekisi/column-69.pdf</a>)A4にして3ページの分量を簡単に紹介しよう。

#### 1 マレー沖海戦における日本海軍航空隊

大艦巨砲から航空主兵への先鞭をつけ、英首相チャーチルをして絶句せしめたとされるマレー沖海戦(1941(S16)年12月10日)における日本海軍航空隊の無用な殺生を回避した美談である。

英東洋艦隊旗艦プリンス・オブ・ウエールズは巡洋戦艦レパルス、駆逐艦3隻を伴い シンガポール港を出撃した。英艦隊を捕捉した日本軍は、最新鋭の一式陸攻を含む85機 を出撃させて、英艦隊に波状攻撃を敢行した。

海軍航空隊の第6次攻撃でレパルスが沈み、プリンス・オブ・ウェールズも沈没に瀕したと見るや、第7次、第8次攻撃隊はこれに止めを刺さず、残存の駆逐艦3隻を見逃して、溺者救助に当たらせた。そして、爆弾は域外に棄て、旋回して帰還した。

翌日、その海域に慰霊の花束2つを投じた。1つは戦死した日本軍人の霊のため、他のもう1つは戦いに敗れた英国軍人の霊に対してであった。因みに、2艦の戦死者は840人、救助されたものが2081人であったという。英国駆逐艦の艦長は、「我々は攻撃を受けなかった。救助の妨害も受けなかった。敵の攻撃機は戦艦の上を航過しなかった」と証言した。

## 2 日本海軍駆逐艦「雷」による決死の敵兵救助(引用)

『昭和17年3月1日、スラバヤ沖海戦で日本海軍に撃沈された英国海軍艦艇2隻の乗組員422名を、翌3月2日「雷」(1,680トン、乗員220名・艦長工藤俊作中佐)が救助します。この海面は、敵潜水艦の存在も考えられる

海域であったにもかかわらず、艦長の命により、浮遊する敵 将兵全員の救助に当たり、重油にまみれた将兵の服を脱がせ てその身体を丁寧に洗浄し、さらに艦に搭載されている被服



と食料を提供して労わりました。その後、イギリス士官だけを集め、工藤艦長は士官たちに敬礼をした後に「諸官は勇敢に戦われた。諸官は日本海軍の名誉あるゲストである」と英語で話されました。この工藤艦長の言葉に、イギリス士官たちは心から感銘を受けたといわれます。この士官達の中にサム エル・フォール卿・元英国海軍少尉(英国駆逐艦・エンカウンター乗員)がいました。彼がのちに世界にこの詳細を伝えることになります。このことは数年前まで日本の誰もが知らなかった事実でありますが、恵隆乃介氏の著書である平成17年刊行の「敵兵を救助せよ!」(草思社刊)によって、その全貌が明らかになりました。』

『いつ敵からの攻撃を受けるかもしれない危険な海域の中で、救助活動をすることがどれだけ危険か、・・工藤艦長の「救助!」の命により、「雷」の乗組員たちは、イギリス将兵を救助するため、ロープや縄梯子などを投げ入れ・・パニック状態・・イギリス士官が号令をかけると、全員が一瞬で秩序を取り戻し・・重傷者は、「雷」の近くまで泳ぎながらも力尽きて沈み、・・日本兵は「頑張れ!」と涙を流し・・たまりかねた1人の日本人水兵は、命令違反を覚悟で海中に飛び込み、沈んでいくイギリス水兵を支えてはロープを巻きつけ始めました。次々飛び込む日本兵。・・(以下略)』

\* 日本人は今なお脈々として武士道精神を堅持していると信じる。戦場という極限の中に あっても健全なる武士道精神を発揮し得る日本人は何と素晴らしいのだろう。まだまだ 知られざる戦場の美談はある筈だ。

## 第百九十話 日本的問題解決法の失敗

日米開戦に先立ち、「対米英蘭蒋戦争終末促進に関する腹案」を決定(1941/11/15) して作戦を開始した日本軍は、初期進攻作戦が予期以上に進展し、爾後の戦争指導を如何にすべきかの検討を行った。陸・海軍の意見が対立し、一致を見なかったために、両論併記的な「今後採ルヘキ戦争指導ノ大綱」(1942(S17)/3/7)となり禍根を残した。国家の命運を決するかもしれない局面においても、和を尊び徹底的に議論して意見調整を行わない日本的な問題解決法は極めて問題であったと云えよう。

# 1 今後採るべき戦争指導の大綱の検討経緯

日米戦開始前に明確にしていなかった第二段作戦構想を早期に策定する必要性に迫られた大本営は、その検討に着手した。2月中旬以降陸海軍中枢課長クラスによる議論が続けられたが、意見は容易に決着しなかった。陸軍は、「既得の戦果を確保して、長期不敗の態勢を確立する。」を、海軍は、「既得の戦果を拡張して、英米の屈服を図る。」を主張した。陸軍は、自給自足態勢と不敗態勢の確立を主眼としていたが、海軍は攻撃続行による米軍との徹底的な決戦を志向していた。

議論の収束が見えぬなか大本営政府連絡会議も近づき、次のような折衷案が、佐藤賢 了陸軍軍務課長から提示された。「既得の戦果を確保して、長期不販の態勢を確立し、 機を見て積極的方策を講ず。」

討議は、陸海軍軍局部長会議に諮られ、漸く3月4日に決着した。折衷案の主要部分が、次のように修正されたのである。 「既得の戦果を**拡充**して」「長期不敗の態勢を**整えつつ**」

本戦争指導の大綱は、3月7日の大本営政府連絡会議に掛けられたが、噛み合わない議論があったものの、東条首相は、「いずれにしても意味が通らないではないか」と述べたが、議論を打ち切った。

## 2 禍根あり

陸海軍は、本構想を自分に都合の良いように解釈して、夫々の作戦を遂行していった。 海軍は、5月MO作戦、6月MI及びAL作戦、7月FS作戦を追求し、ミッドウェー(MI)での大敗北となった。腹案で構想した南方資源帯確保長期不敗態勢の確立構想は吹き飛んだ。

- 3 日本的問題解決の弊害等
- (1) 小生の経験でもそうだが、日本の組織では、徹底的に議論して結論を得るのではなく、ある所で文言的に妥協して双方の顔を立てる。それが美徳とされる。
- (2) 国家の存亡を掛けた或いは命運を決めるような局面でも同様なことが起きる。
- (3) 大本営政府連絡会議も、結局日本的な組織であったと云うべきだろう。大局観をもって断を下すべきトップリーダーを持ち得なかった日本である。陸海軍並立、統帥権独立、君主無答責であり、このような仕儀となるは必定だったのだろう。
- (4) 「腹案」で、長期持久態勢の確立方針が定まっていたのだとする陸軍に対して、海軍は、第一段南方作戦が予期以上に進展し、情勢有利な場合であり、対米決戦の好機であると主張した。非常に魅力的な考え方ではあるが、その実現可能性は果たしてあったのか?当初計画を墨守すべきか、状況に応じて柔軟に対応すべきか?
- (5)戦争開始前に明確な疑義のない構想を確立しておくべきだったのだ。「腹案」は腹案に過ぎないとの批判もある。
- (6) 重大局面で明確な結論を導き得るシステムと人材が望まれる。
- \* 日本的問題解決策は、当面の問題を先送りしてしまう。先送りすればするほど、その 亀裂が深くなり修復不能の状態に陥ってしまう。日本的システムの限界だ。

(第百九十話 了)

## 第百九十一話 日本は侵略国だったのか?

盧溝橋事件を発端とする支那事変は、日米英蘭戦勃発に至るも解決を見ず、遂に日本のポツダム宣言受諾を受けて終了することとなった。この日支間の戦い(或る人は日中戦争と云うが・・)を如何に評価すべきか、果たして、侵略戦争だったのか?日本は、細川首相の侵略戦争明言に続き、1995年8月15日の村山談話で先の大戦は侵略戦争であったと認めたとされ、その後の政府は基本的にそれを踏襲している。踏み絵ともなっているようだ。

世論調査でも、日本の支那大陸における行動は侵略であると認識する者が多い。しかし、史実を仔細に見れば事実は異なる。確かに、日本にも対応の不味さがあり、結果的に日本悪玉論が蔓延った。<参考 世論調査結果> 読売新聞「検証戦争責任I」によれば、日中、日米戦争『ともに日本の侵略戦争だった』と『中国との戦争は侵略戦争だったが、アメリカとの戦争は侵略戦争ではなかった』がともに34%で拮抗しているという。対中戦については68%が侵略戦争と考えているという。

- 1 中国がいま尚、「日本の中国侵略と世界征服の陰謀」の共同謀議の証拠として利用し 続ける所謂「田中上奏文」は偽書である。(第五話参照)
- 2 日本は盧溝橋事件(1937/7/7)以来、一貫して戦火の拡大を防止しようと努力してきた。 その間に行われた軍事行動は、所謂一撃論に基づくものであって、軍事占領を企図した ものではなく、侵略意図は毛頭なかった。(第三十六話、第百八十八話参照)
- 3 詳細は割愛するが、反日・悔日挑発事案の頻発、通州事件(1937/7/29)(通州事件: 第六話参照)や大山中尉殺害事件その他に際して、日本の隠忍自重も限界に達し、「暴支 膺懲」論が起きた。この日本の行動は、仮に過剰防衛ではあったとしても侵略行動と誰 が非難できようか?
- 4 日本は様々な和平工作を行い、それが功を奏するかと思われる場合もあったが、頓挫するに至った。これらが結実しなかったのは、和平を望まない中国側勢力による妨害等であり、責任の大半は中国側にある。(第二十五話参照)
- 5 ソ連 (コミンテルン) の暗躍により、抜けるに抜けられない状況に陥ったのであり、 結果的に支那大陸内で武力行使したものである。決して意図的ではなかった。 (国共合 作抗日一致策、国民党軍と日本軍を戦わせて、双方を疲弊させ漁夫の利を得る策、国民 党の分裂と和平の妨害工作等)
- 6 中支に戦火が拡大した第二次上海事変 (1937/8/13) は、約三万人の居留民を保護する ために、止むを得ず 2 個師団を派遣・反撃したものであり、正しく邦人保護のための自 衛行動であった。 (第七十九話参照) 上海事変は、背信的独軍顧問の助言を受けた蒋介 石軍約六万による計画的対日作戦であった。この事変により、日本は泥沼深く嵌まった。
- 7 欧米列強及びソ連 (中ソ不可侵条約軍事秘密協定 1937/8/27) の支那への軍事援助或いは日支対立激化工作、西安事件 (1936/12/12) による第二次国共合作が奏効して、日本は出口を塞がれた。蒋介石等の徹底的な国際宣伝戦に、日本は敗北した。

(第十話、第十一話、第五十話、第百二十三話参照)

- 8 日米交渉の肝は支那撤兵問題だったが、米国は日本に決して妥協をせず、追い詰めた 米は、裏口参戦の機会を虎視眈々と狙っていた。出口なき戦いを強いられたのであって、 決して侵略戦争ではなかった。
- 9 「侵略」の明確な定義はなく、自衛戦争との線引きは難しい。結果的に大陸の主要部分を占領(面積:伝統的中国本土の50%弱、住民数:全人口の4~5割)したとは言え、それは自衛戦の結果であって、侵略を目的としたものではなかった。弱者との戦い即ち侵略戦争だと言うべきではなかろう。
- \* もがき苦しむ日本の悲しき姿が浮き彫りになってくる。悲しい程だ。

#### 第百九十二話 背信行為、許し難し!

第二次上海事変 (1937/8/13~)で、日本軍は約4万名の戦死傷者を出し、苦戦した。この苦戦の要因は色々あるが、中国軍が近代的な軍隊へと変貌していたことが最大の理由である。その陰には中独合作と呼ばれる中華民国と独との軍事・経済的な連携があった。独と日本は友好国ではなかったのか?

#### 1 中独接近

軍の近代化が必要な中国と資源(特にタングステン)の安定供給が必要な独の利害が一致しての中独接近となった。 1920年代後半から軍事顧問団が形成され、これ以降独の最新兵器が中国に供与されるようになった。第一次上海事変(1933/1/28)では、独軍の指導を受けた2個師団が参戦した。



#### 2 独の軍事援助

1933年5月、独の元陸軍参謀総長であったゼークトが、蒋介石の経済・軍事の上級顧問となった。ゼークトは軍事改革を進めるとともに、『日本一国だけを敵とし、他の国とは親善政策をとる』ことも進言した。独製武器を装備した20個師団の創設、教導総隊の創設、各軍学校創設を推進した。中国内の独産業統括会社の創立、中独協定による鉄道開発、更には「軍事産業三ヵ年計画」、中国軍備拡張計画等々を推進した。

注目すべきは、ゼークトの後を継いだファルケンハウゼン中将が、1935年10月に「漢口と上海にある租界地の日本軍を奇襲し、主導権を握る」ことを進言し、翌1月には対日戦に踏み切るべしと進言したことだろう。主敵の転換が行われた?

独軍の軍事援助は、人材育成と組織整備だけではなく、軍需物資提供にも及んでいた。 小銃、機関銃、迫撃砲、山砲、装甲偵察車等で中国軍の近代化は急速に進展した。 国民革命軍の内、8個師団は、ドイツ式に訓練されて革命軍の主力となった。

#### 3 中国軍の対日戦準備の推進

1934(S9)年、蒋介石は上海・南京間の陣地構築を始めた。上海から南京の間に3線のトーチカ群(淞滬線、呉福線、錫澄線)を構築し、これらはヒンデンブルグ・ラインとも呼ばれた。杭州湾正面にも三線陣地が設けられた。縦横に走るクリークと点在する部落の民家を掩蔽壕とし、有刺鉄線を設け地雷を敷設して、部落が要塞と化し、それらが2~300m間隔で連接されていた。

### 4 日本軍の苦戦と増派決定そして革命軍潰走

8月23日、日本陸軍上海派遣軍の二個師団は上陸に成功したものの、橋頭保を確保したのみで戦線は膠着、進展しなかった。為に、大本営は更に第10軍(三個師団等)を増派し、軍は杭州湾に上陸した。10月26日要衝大場鎮を奪取し、上海を制圧できた。

5 戦力の逐次投入と批判することは容易いが、第二次上海事変は支那事変のターニングポイントともなった。日本は上海付近の兵要地誌を掌握できず、独軍顧問団についての正確な情報も把握していなかった。舐め切っていたのか?何れにしろ、これ以降日本は支那から抜けられなくなったのだ。

日独防共協定は、1936(S11)年11月に締結されており、日独は少なくとも友好国ではなかったのか?そして日本はこのような国と三国同盟を締結(1940/9/27)してしまうのである。三国干渉を行い、第一次大戦で日本は独に宣戦し、戦後独領は日本の信託統治領となった事等を考えると、独には反日感情があった(?)。また、中独貿易も盛んになり、中国に対する親近感が増していた。ヒットラーには人種差別意識が強かったとも。ヒットラーが対ソ戦略を意識すると中国援助は下火にはなったようだが、・・

日本の度重なる抗議を受けて、独顧問団は 1938 (S13) 年 6 月 24 日帰国することとなった。独にも弄ばれたか?

#### 第百九十三話 主敵を見誤った?

日本は大陸における国際的に合法な権益を守りたいが故に、不拡大を標榜しつつも、押し寄せる脅威への反撃及び一撃論に基づく攻撃を繰り返しているうちに大陸での戦線が拡大し、結局は抜けるに抜けられなくなってしまった。この泥沼化には仕掛け人が居る。(第百九十一話及び第百九十二話参照)

#### 1 第二次国共合作

1935 (S10) 年7月モスクワで開かれた第七回コミンテルン世界大会で重要な決議が為された。「ファシズム組織等への潜入・内部崩壊」「共産主義化の目標として日、独、ポーランドの選定及び「これら三国に対しての英仏米と連携撃破」「日本共産主義化のため中華民国重用」の決議である。



西安事件 (1936/12/12) を機に、コミンテルンの指示もあり共産党は国民党との合作に活路を見出そうとした。「内戦停止と一致抗日」を約束させられた蒋介石の国民党南京政府と共産党は、1937 (S12)年3月和平交渉で合意した。蒋介石は盧溝橋事件(1937/7/7) に際してもその決意表明にも拘わらず日本と妥協的であったが、南京政府内の抗日体制が強まり、8月8日には「全将兵に告ぐ」演説を行い抗日戦の決意を表明した。第二次上海事変 (1937/8/13~) が勃発するや国共合作が進展し、9月23日国共合作 (~1945/8) が成立した。

共産党に懐疑的な蒋介石ではあったが、ソ連との中ソ不可侵条約の締結(1937/8/21)と 共産党の合法化による共産主義勢力との連携で難局の打開を図らざるを得なかった。一 方、壊滅寸前・風前の灯火であった共産党は国共合作により生き延びることが出来た。 共産党軍は国民革命軍の八路軍或いは新四軍となって、国民党の各種援助を受けた。

### 2 暗躍

- (1) 盧溝橋事件の拡大の仕掛け人 第一発の犯人?廊坊事件や広安門事件は? 直後のコミンテルンの中国共産党に対する指示、宋哲元の29軍の性格?
- (2) 反日・悔日の扇動者は? 反日ナショナリズム燎原の火の如し
- (3) 日本との和平工作が頓挫したのは? 妨害工作
- (4) 日本との妥協的要人に対する糾弾、漢奸・売国奴として排除
- 3 漁夫の利を得て遂に共産党国家建国(1949/10/1)

日支両軍を疲弊させ、自らは態良く逃げ回って勢力温存と拡大を図り、遂には大東亜 戦後の国共内戦に勝利した共産党は念願の建国を果たした。毛沢東は、1961(S61)年1月 24日中国訪問社会党国会議員に『日本軍に感謝』発言をしたとされるが、本音を吐露し たものだ。

4 日支双方にとっての主敵は誰だったのか?

失敗の英雄とも呼ばれた孫文の命でソ連赤軍の軍制視察をした蒋介石は、コミンテルンの目論見を見破り進言したとされるが、孫文の容れるところではなかった。

共産党に対する警戒感はあったものの、難局打開のために悪魔とも手を結ばざるを得ず、時に反発し合いながらも国共合作は継続したのである。そして結果的に、共産中国に台湾に追われることとなった。主敵を見誤ったとも言えるだろうし、蒋介石をその方向に追い込んだ日本にも責任の一半はあるのかも知れない。日本だって、対ソ脅威論が強かった筈だ。第一次近衛声明(1938/1/16)の「国民政府を対手とせず」は果たして妥当だったのか?共産党を利したのみでは?蒋介石も日本も、主敵を見誤ったのではないかと考えざるを得ない。現今の東アジアの情勢を考えると、特にその感を強くする。

5 支那事変を裏で操っていたのは、コミンテルンであり、米国であり、ドイツである。 日本はそれが解らずに引き摺りこまれたのだ。

#### 第百九十四話 無条件降伏論争

日本は無条件降伏したのか?今なお、巷間、日本は無条件降伏したと信じられている。 教科書等でもそのように記述されている。1978(S53)年、文芸評論家江藤淳氏と本多秋五 氏の間で『無条件降伏論争』が行われた。政府は、2009(H19)年、衆議院質問答弁書で「無 条件降伏の定義について一概に述べることが困難であるということもあり、・・様々な 見解があると承知している。」と答弁している。どう考えるべきだろうか?

### 1 連合国の枢軸国戦後処理方針

米ルーズベルト大統領は、南北戦争の戦後処理を参考に、枢軸国に対して、カサブランカ会談(1943/1/26)及びカイロ宣言(1943/11/27)を経て、無条件降伏を宣明した。日本が受諾したポツダム宣言(1945/7/26)では、「全日本軍隊の無条件降伏」との表現に緩和されている。ル大統領の死亡、日本軍の頑強な抵抗、独に対する無条件降伏要求が戦いの激化・長期化につながったこと等が影響を及ぼした。

日本は、ポツダム宣言を受諾し、9月2日東京湾の米戦艦ミズーリ号甲板上で降伏文書 に調印した。

## 2 無条件降伏論争(1978(S53)年)

江藤氏は、ポツダム宣言にある条件を受諾しての降伏であるから 無条件降伏ではなく、無条件降伏したのは日本軍隊であり、日本国 ではなかったと主張した。本多氏は、カイロ宣言にあった日本国の 無条件降伏はポツダム宣言にも通底しているとした。国際法学者高 野東大教授は、「独と異なり政府の存続が認められたのが日本の降 伏であるとした上で、無条件降伏ではない」という点では江藤が正 しいと指摘した。

渡辺昇一氏やケントギルバート氏も、無条件降伏ではないと論じている。

『ポツダム宣言第五項は、我等の条件は左の如しとして、第六項以下の条件を明示し、 無条件降伏なる語彙が用いられたのは、第十三項で「全日本国軍隊の無条件降伏」とさ れている。』

#### 3 当時の認識等

マッカーサーは、日本の降伏は無条件降伏であると認識していた。

一方、当時の米国務省(の覚書で)は、国際条約の体裁を有した有条件降伏文書であると認識していた。

一方、日本では、無条件降伏であるとの言が大勢(吉田首相(S24)、条約局長(S26)、外務大臣(S46)、各種裁判(S28)等)であった。これを想うに日本人は無条件降伏をしたのだと思い込まされてきたのだと思える。

#### 4 色々な見解等

- (1)日本軍に関しては無条件降伏であることに異論はないようだが、日本国については、無条件降伏ではなかったとする説、条件付きの無条件降伏説、無条件の降伏説がある。
- (2) 降伏文書では、国体護持が認められており、(宣言には明示していないが、日本側は、そのように理解するとした。)日本はあ、その条件のもとに降伏したのであり、 無条件降伏ではないとの論も強い。
- (3) カイロ宣言の無条件降伏要求が、日本の和平の芽を摘み、戦争の長期化を齎したとの意見もある。
- (4) ソ連による抑留や北方領土占領は明らかに、ポツダム宣言に違反している。ソ連は、 対日参戦と同時にポツダム宣言に署名している。
- (5)独は明らかに国家として無条件降伏して国家そのものが消滅したが、日本は国体護 持をも認められ、間接統治を受けたとはいえ国家は継続したという相違がある。
- \* 無条件降伏論の呪縛から脱却すべきだ。

#### 第百九十五話 日本の敗因について

大東亜戦争の敗因(少なくとも武力戦においては米英等に屈服)については、色々な視点から多々論ぜられ、百家争鳴の感がする。本メモランダムでも敗因を種々列挙(関連メモランダムの参照は割愛)している。これらには、根本的な要因と思われるものもあればマイナーな要因であると考えられるものもあるが、それらを俯瞰し、どう考えれば良いのかを考えてみたい。

## 1 様々な敗因論

- (1) 国力に係る視点
  - ・GNP10 倍~20 倍の敵との戦争は無謀
  - ・科学技術力や工業生産力の懸隔
- (2) 国家戦略に係る視点
  - ・国家戦略の不在・不統一
  - 情報戦、宣伝戦、諜報戦等の軽視
  - ・歪な政軍関係(統帥権、軍部大臣 etc)
  - ・同盟戦略(同盟国家選定の要件は?、戦略調整)
  - 戦争終結戦略の策定(可能性の検証、和平機会の捕捉失敗)
  - ・戦争相手に関する分析力不足(戦意、士気、国民性 etc)
  - ・軍事戦力造成の方向性の妥当性

## (3) 軍事戦略

- ・進軍限界の無視、国力以上の戦線拡大(多正面軍事作戦、初期作戦後の戦略の齟齬(内 包矛盾の露呈)
- ・真珠湾攻撃の必要性に関する疑問
- ・現地の実情を無視或いは未掌握状態での作戦計画策定と遂行
- ・陸海軍の深刻な対立(統合戦略の欠如、大陸は陸軍、海は海軍との棲み分け意識)
- ・南方資源国内環送戦略の欠如 or 態勢不十分
- ・戦略、作戦や戦術変換の遅延(問題解決策力や新戦法案出力不足)
- ・過剰な精神主義を軍事に持ち込む愚
- (4) 国民性・文化・風土等
  - ・温情的人事 ・表面的妥協を是とする性向
  - ・現状認識や戦果確認の不十分
  - ・熱狂・扇動的国民性・独善的或いはお人好し
  - ・強硬論や声望の大なる者の意見に引き摺られ或いは左右される性向
  - ・言外の理に依拠(明快な命令・指示は?)
- (5) その他
  - ・真の国家的リーダーや補佐組織の不在(政・軍に通暁し、危機を克服し得る識能と 気迫、統率力大
  - ・天皇助言重臣の存在感希薄
- 2 これらから見えてくるもの
- (1) 日本型システムの欠陥
- (2) 強かな国際政治に翻弄される国民性
- (3) 持たざる者の悲哀
- (4) 大勢に抗しきれずに悲劇に驀進
- \* 偏見と独断で例示した。これらの内には、改善されたものもあれば、今猶往時のままとも思える面もある。美点を伸ばしつつ、改善の努力を続けるべきだ。

(第百九十五話 了)

## 第百九十六話 ベストセラー作家の日本人処方箋

「日本人とユダヤ人」を著した著名な評論家である山本七平(1921~1991)は、大東 亜戦争に砲兵少尉として参戦し、捕虜となった。その山本氏の著作「日本はなぜ敗れる のか 敗因 21 カ条」が角川書店から 2004 年に発行された。

日本人論の決定版とも称される該書の要点を紹介したい。己を見直す参考として貰えれば幸甚である。帯(裏)には、「ベストセラー「日本人とユダヤ人」で有名な評論家山本七平は戦時中フィリピンで生死を彷徨い捕虜となった。戦後三十年、かっての敗因と同じ行動パターンが社会の隅々にまで覆っていることを危惧した山本七平が、戦争体験を踏まえ冷徹な眼差しで書き綴った日本人への処方箋が本書である。(以下略)」

- 1 裏カバーには、以下の六カ条が、「日本が敗者になる理由 は・・?日本人論の決定版」の項目として記載してある。本6 か条は、敗因21ヵ条とは別であるので、それをまず記す。
  - ・非常識な前提を「常識」として行動する
  - ・生命としての人間を重視しない
  - ・「芸」を絶対化して合理性を怠る
  - ・「動員数」だけをそろえて実数がない
  - ・恐怖心に裏付けられた以外の秩序がない
  - ・自己を絶対化するあまり反日感情に鈍感である
- 2 敗因 2 1 ヵ条(本条は、故小松真一氏(本書第1章の登場者:陸軍専任嘱託で技術者、比島で終戦捕虜収容所で苦労して「慮人日記」を著し、戦後発行、本書 35~37p)
  - ・精兵主義の軍隊に精兵がいなかった事。然るに作戦その他で兵に要求される事は、全 て精兵でなければならない仕事ばかりだった。武器も与えずに、米国は物量に物言わ せ、未訓練兵でもできる作戦をやってきた。
  - ・物量、物資、資源、全て米国に比べ問題にならなかった。
  - ・日本の不合理性、米国の合理性
  - ・将兵の素質低下(精兵は満州、支那事変と緒戦で大部分は死んでしまった)
  - ・精神的に弱かった(一枚看板の大和魂も戦い不利となるとさっぱり威力なし)
  - ・日本の学問は実用化せず、米国の学問は実用化する
  - ・基礎科学の研究をしなかった事
  - ・電波兵器の劣等(物理学貧弱)
  - ・克己心の欠如
  - ・反省力なき事
  - ・個人としての修養をしていない事
  - ・陸海軍の不協力
  - ・一人よがりで同情心が無い事
  - ・兵器の劣悪を自覚し、負け癖がついた事
  - ・バアーシー海峡の損害と戦意喪失
  - ・思想的に徹底したものがなかった事
  - ・国民が戦争に厭きていた
  - ・日本文化の確立なき為
  - ・日本は人命を粗末にし、米国は大切にした
  - ・日本文化に普遍性なき為
  - ・指導者に生物学的常識がなかった事
- \* 確かに耳の痛い話もある。自省の参考になれば幸いである。



### 第百九十七話 大東亜戦争肯定・否定論

戦後、日本悪玉論が蔓延る中で、転向作家林房雄氏の「大東亜戦争肯定論」が昭和38年9月号の中央公論紙上で発表(~40年6月)され、一大反響を巻き起こした。この頃から、大東亜戦争肯定論とアジア侵略の太平洋戦争論の対立が激化したと云える。

### 1 大東亜戦争肯定論等について

林房雄は、大東亜戦争の開始を1845年(弘化二年)とし、西欧勢力の東漸に対する 反撃として"大東亜百年戦争"を本質は解放戦争であり、欧米列強によるアジア侵略に対 するアジア独立のための戦いであった、とした。

中村燦(元独協大学名誉教授)は、その書「大東亜戦争への道」で、門戸開放主義を巡る日米抗争及び共産主義との戦いという大きな筋道を探り当て、この二大潮流が合して高まる極頂点に大東亜戦争が定位すると喝破した。これらに対する否定論者からの反撃も激烈であり、未だに肯定・否定論争が続いている。著名な保守論客福田恒存は、『自分は「大東亜戦争否定論の否定者」である。』との名文句を吐いたとされる。

## 2 代表的な肯定・否定論等

## (1) 東京裁判史観

本戦争は、極東国際軍事裁判で、「日本の軍国主義者の共同謀議による侵略戦争」であったと断罪し、その洗脳教育故に、自虐史観とも呼ばれる。東京裁判でインドのパール判事の日本無罪論は夙に知られている通りである。

## (2) マルクス主義史観

戦争責任を東京裁判が認定した一部軍国主義者と言うより、明治維新以来の近代日本の資本主義に内在する問題であるとし、大東亜戦争を帝国主義相互、ファシズム対反ファシズムの戦い、被支配民族による解放戦争との枠組みで捕らえようとする。余りにもドグマティック、イデオロギー色が強烈だ。侵略の必然性を主張するが、無理があるのではと考える。

## (3) 自衛戦争史観(大東亜戦争肯定論)

戦争を欧米の圧迫に対する自存自衛のための戦いであり、且つアジア解放の戦いであったとする捉え方である。次のような著作があるが、ニュアンスの差は多々だ。大東亜戦争無罪論(林房雄)、大東亜戦争への道(中村燦)、国民の歴史(西尾幹二)、日本国記(百田尚樹)、アジアを解放した大東亜戦争(安濃豊)、日中戦争は中国の侵略で始まった(阿羅健一)、黄文雄の大東亜戦争肯定論、新大東亜戦争肯定論(富岡幸一郎)等がある。アジア解放が目的か結果なのかを問う声もある。

# (4) 自由主義史観

上述(1)~(3)の何れにも与しないとの立場から、藤岡信勝氏が提唱した史観で、左翼的な史観に疑問を投げかけ、批判する。新たな見解を多く示した功績は大。

## (5) コミンテルン陰謀史観

モスクワの指導の下、1920年テーゼに則り、陰謀を巡らし、日米相戦わせるように 仕組んだというものである。本戦争で誰が一番得したかを考えると一目瞭然?

- (6) その他、百家争鳴の一部:戦争相互責任論(同罪論)、軍事的敗北なるも戦争目的達成論、現代価値観で過去を裁く事の不可論、日本人の歴史認識の希薄さ嘆息論、上山春平の流れを汲む信夫清三郎の触媒説、人種戦争論、殉国史観、明治期は正しく、昭和期は誤ったとする司馬史観、引き摺られ・宣戦なき戦争に嵌まった戦争論何れも一面の真理を含んでいると云えよう。
- (7)「戦争呼称」から歴史認識が推測される。細部は割愛する。
- \* 国家としての歴史認識を確立すべきであり、国家として当然の権利・義務である。

## 第百九十八話 大東亜戦争の世界史的意義

日本として、大東亜戦争から、「何を学ぶべきか」と同時に「世界史的な観点からどのように理解すべきか」を考察することも重要である。戦後七十数年を経たが、近現代史が確定したとは言えない。世界的な視点から本戦争を眺めてみると、大東亜戦争の重要な側面が浮かび上がってくるかもしれない。引き続き、小生の偏見と独断で、それらを例示してみたいと思う。

- 1 保護主義国家及び国家群の存在は、世界の安寧にとってマイナスの面が強い。持てる 国、持たざる国の決定的な対立に至らないような国際的リスク管理が必要だ。
- 2 歴史は勝者の歴史であるとの俚諺があるが、敗者にも相応の言い分があり、それは充分に考慮されるべきだ。
- 3 国家間相互の警戒感、悪感情、嫌悪感は増幅され、負のスパイラルに陥る懸念あり。
- 4 (国際的)制裁の一環として、経済的にある国を追い詰めることは、結果的に国際社会にとってはマイナスである。現在においても、経済制裁等は、心理的効果はあるとしても、政体や政策の大なる変更を齎した例は少ない。期待する効果と制裁のレベルがマッチングしていない。厳しい制裁は、逆にリスクを高めてしまうと考えた方が良い。制裁リスクは至当に判断することが必要である。
- 5 強制力を持った超国家が存在しない場合の、国家間の紛争処理については、紛争相手を極端に追い詰めることは、窮鼠猫を噛むに似て問題が大きくなる可能性が大である。 大国がなりふり構わぬ横槍を通すのであれば、それは逆効果である。"一寸の虫にも五分の魂がある。"を認識する必要性が再認識された。国家も名を惜しむのだ。奴隷の生存を選択した国家は消滅する。
- 6 国際連盟の無力さが浮き彫りになり、欠陥が明確になった。
- 7 日本は、日露戦争で薄氷の勝利を得て、白人優越論に風穴を開け、大東亜戦争において、欧米白人社会と互角以上の戦いをしたことで、アジア諸国等に自国近代化の必要性を認識させ、白人に対しての劣等意識を払拭し、自信を与えたと考えられる。
- 8 大東亜戦争の戦争目的の一つである大東亜諸国の植民地解放を成し遂げ、或いはその 契機をそれら諸国に与えた。大東亜戦争は、欧米植民地主義に対する異議申し立てとい う側面も強い。戦後、欧米の植民地主義に対する国際的な批判が高まった。
- 9 当時の国際的規範や常識に照らして妥当な国策すらをも否定して、自らの権益増大を 図るために、美辞麗句、何者も反論し得ないような理想論を持ち出すことの、不可思議 さが理解され始めた。理想論や原則論を振り回すことの愚を知るべし。
- 10 敗戦国に対する弱体化政策や一方的な史観の押付は武力征服以上に悪辣であり、民族 抹殺にも等しい。また、そのような政策は何れ破綻する筈だ。
- 11 敗戦国に対する戦争犯罪裁判の妥当性に対する疑義、復讐裁判との認識広がる。
- 12 国際的に、戦争を如何に規定し管理するか?
- 13 米国が初実戦使用した原爆の非人道性が明白になり、大量破壊兵器の抑制的管理方策が模索され始めた。
- 14 国家としての態を為さない国家に対して、国際社会は如何に関与すべきか?関係国が 夫々の思惑で関与することは、混乱を助長する。統治システム不全、破綻国家、内戦下 の国家への国際社会の対応は今なお重要課題であり、解が見えない。
- 15 国は戦いに敗れても、国民の高いモラル、道義心、愛国心(殉国心)、文化・教育力があれば国家の再建は可能である。
- 16 過酷な国家賠償は、反発心を惹起する。
- \* 人間の叡智を信じたいものだ。

第百九十九話 我が国の再生を目指して

大東亜戦争メモランダムを終えるに当たり、その間に小生が感じた日本再生の処方箋の一部をアットランダムではあるが提示する。

- 1 戦争の呼称について
  - 戦争目的に直結し、国家のアイデンティティに関わる問題であり、一般的な名称は当 該戦争の意義をも見失わせる。自信をもって使用すべきことから日本再生が始まる。
- 2 極東軍事裁判の不当性、当該裁判で示された特異な史観及びGHQにより強要された 憲法その他の諸政策を見直し、国民自らの手で新たな日本の姿を確立する必要がある。
- 3 日本国家としての大東亜戦争に係る正史の確定が必要である。
- 4 一部の国による謂われなき誹謗中傷に対しては、毅然として反論すると共に、我が国としての対外発信力の強化が必要である。
- 5 大東亜戦争間に露呈した日本人の弱点、日本型組織運営の欠陥等を明らかにして、それが改善努力を図るべきである。特に、有事においては温情主義、妥協的・忖度的態度、明確な命令・指示が必須だ。
- 6 戦争に負けたのは事実であり、その過程において種々の誤りを犯したのも事実であ る。反省すべき点は謙虚に反省する必要がある。
- 7 国家的リーダーを如何にして育成するかを検討する必要がある。戦後の日本ではエリート教育が毛嫌いされているようだが、それでいいのか?リーダーたり得る者を如何に 見出し育てるかを真剣に考える時期ではないか。
- 8 戦没者の慰霊・顕彰に関する国家施策を確立すると共に、未帰還戦没者の御遺骨の還送は急務であり、徹底的な対策を講じる必要がある。
- 9 アジア諸国との共存共栄を図ると共に地域の文明的リーダーとしての役割を果たすと 共に、国際的な安定と安定に寄与する。アジア諸国に対しても、大東亜戦争に関する日 本の正当なる立場を丁寧に説くべきである。
- 10 大東亜戦争は決して愚かな、無意味な戦争ではなかった。アジア欧米植民地解放に大いに貢献し、且つアジア諸国民覚醒の一石を投じた。
- 11 決して独善的にならないのは勿論だが、日本人は自らに自信と誇りを持つべきである。卑屈になる必要は毛頭ないし、卑下し、自虐的になるべきではない。戦争間に示された愛国心や殉国精神は美徳であり、もっと誇って良い。経済の復興もさることながら精神の復興こそが肝要だ。忘れられていないか?
- 12 自衛のため又は、強いられた戦いであったとは云え、外国に多大なる損害を与えた事実は変わらない。そのことは認識しておくべきではある。
- 13 戦争の責任を一部の戦犯とされた者のみに帰し、自らの責任を回避するは卑怯だ。
- 14 戦争責任を所謂戦犯に押し付けたことにより、自ら真摯に戦争に向かい合って来なかったのが戦後の日本人である。そろそろ真正面から大東亜戦争に向かい合って将来の日本のための教訓を汲み取らねばならない。
- 15 「戦争の犠牲」という語彙の中には大東亜戦争は無意味・愚かな戦争であったとの深層心理が潜んでいると思う。戦没者は、犠牲者ではなく、尊い殉国精神の発露による散華だったと認識すべきだ。徒に美化するものではないが、至当にその純粋性を認めるべきである。犠牲と言う時には、悪徳代官に死を強いられたと認識しているからだろう。
- 16 日本人に限らず、人間は、極限状況に陥るとその本性が露わになるものであり、その 発現率を可能な限り低くする人間教育が必要である。
- 17 若者に対する大東亜戦争についての相応の教育が必要だ。

## 第二百話 終りに

本話で、番外編一話を除き「大東戦争メモランダム」200話が完結する。関係する書籍を随分読んだが、まだまだ消化不良の面が有るのかも知れない。

都合の良い所だけをピックアップしただけだとの謗りを受ける面もなしとはしないとも思う。何れにしろ、大東亜戦争を、色々な視点・観点から、思いつくままに取り上げて簡潔に表現することに心掛けた。

1 本メモランダムを作成するに当たっては、数多の資料を参考にさせて頂いた。これら の先行研究(著作)の余沢を大いに受けた、感謝である。

IT 社会の恩恵にも大いに預かった。ネットによって関連情報を確認することが出来た。特に Wikipedia は最大限に活用させて頂いた。

2 メモランダムとした理由 大東亜戦争の全てを叙述するとしたら膨大な量となるざる を得ないし、それは小生の力量に余る。然らば、大東亜戦争を諸々の視点で取り上げる ことで、全体像が明らかになるかも知れない。ならば、敢えてそれに挑戦することも意 味あることではないか。

この様な観点から、幅広に、重要なトピックスを採り上げれば、俯瞰的に大東亜戦争 全史を叙述しうるのではないかと考えた。体系的時系列に従っての叙述では冗長となり 無味乾燥となる懸念在り

- 4 自分の意見に都合の良い所だけを切り取る御都合主義(確証バイアス)ではないかとの 批判は甘受する。勿論、可能な限り諸情報の突合せに意を用いたことは当然であるが、 それでも誤認・誤解があるかもしれない。
- 5 ワンテーマ、A4 一枚の分量としたために舌足らずとなった側面もあるが、諒として 欲しい。
- 6 使用した写真は、筆者が撮影したもの以外は、原則として wikipedia からの転載である。
- 7 本話が、日本の再生の一助になれば望外の喜びである。一隅照灯となり得ることを信じて!

(完)

大東亜戦争メモランダム番外編 強かな現実主義の道は

大東亜戦争を語る時、東京裁判で日本の侵略戦争の第一段階とされた満州事変に触れない訳にはいかない。本話では、満州事変そのものよりも、日本を断罪したとされる「リットン調査団報告書」について触れたい。「和解の書」とも呼ばれる本報告書は、本当に日本にとって峻拒すべきものだったのか?

1 柳条湖事件(1931/9/18)と中華民国の国連提訴

日露戦争の講和条約「ポーツマス条約」(1905/9/5)に よって、日本は、遼

東半島(関東州)の租借権、東清鉄道の長春~大連の 支線、朝鮮半島の監督権を得た。鉄道守備隊は後に関東 軍となった。

爾後、日本は、この地の開発に力を注ぎ、荒蕪の地の 繁栄の基礎を築いた。これに対して、張作霖は、満鉄包



囲鉄道の建設を計画し、日本の土地商租権を侵害し、排日教育を徹底し、排日気運が蔓延し、支那兵の悔日行為、鉄道妨害、日支官憲衝突事件、在満朝鮮人迫害・テロ等が頻発した。中国国内では、ナショナリズムが高揚、国権回復と排日運動が高まっていた。ロシア革命の成功も日本に様々な影響を及ぼしていた。何れにしても、日支間の頻発する紛争が、何らかの切っ掛けで発火する恐れが高まっていた。斯かる状況下で、事変を誘発したのが「中村大尉殺害事件」(1931/6/27)である。

そして、9月18日、関東軍の石原参謀の策謀により満鉄線を爆破するという柳条湖事件が勃発し、朝鮮軍の独断越境もあり、次第に拡大していった。中国は、9月21日、日本の軍事行動は不法な侵略行為だとして国際連盟に提訴した。

2 リットン調査団〜国際連盟脱退

1932 (S7) 年 3 月英のリットン卿を団長とする調査団が派遣され、同年 6 月に調査完了し、10 月 1 日に報告書を日本に通告した。この直前の 9 月 15 日日本は、電撃的に満州国を承認した。同報告書に基づく勧告は、33 年 2 月採択され、日本のみが反対した。日本代表松岡洋右は連盟脱退を通告して退場した。

1933(S8)年5月、日中両国は搪沽停戦協定に調印し、満州事変は終結した。

- 3 リットン報告書の評価等
- (1)報告書は、英、仏、伊等連盟各国が「和解の基礎が築かれた」と大きな期待を寄せた文書である。形式的には中国の満州における主権を認め、実態としては自治地域としての満州であれば構わないという妥協的な報告書であると評価される。即ち、中国の主権と領土保全という普遍的な原則を前提としながらも、満州における日本の権益と歴史的な関わりなど特殊事情にも配慮していた。調査団のメンバーは日本に好意的な人選だったと云われる。
- (2)日本は、同報告書、勧告に反発して、国際連盟を脱退する必要があったのかとの疑問も呈されている。当時、連盟居座り論もあり、"実を取る方法"はあったようだが・・もっと強かに振る舞えなかったのか?100か零かと云う思考法ではなく第三の道を模索出来なかったのかとも思える。それすらも許さないような日本国内の熱気だった?満州国の正式承認が絶対的条件だったのか?
- (3) 国内の政治が不安定で、ブロック経済の影響を受け、社会情勢も不穏で、軍も下克上的風潮が蔓延し、誰しもがリーダーシップが執れずに、情勢のコントロールが出来ない状況だった。安易な運命論に与する積りはないが・・
- (4)満州は中国の領土だったのかについても疑問がある。中国に統一政府が存在し満州 を統治していたのか?当時の常識に照らして、日本だけが断罪されるべきなのか?少 なくとも、現在の価値観で当時を評価してはならないだろう。
- \* 日本にも欧米列強並みの強かさが欲しいと願うのは過望か?